あるロマンチスト
（小島文八）の生涯（後編）

藤井公明

目次

一　日露戦争の後
○　政　局
○　小島好問
○　戦後経済と大越成徳
○　文学と宗教
二　道を求めて
○　台湾行
○　安東県
○　旅順戦跡
○　長途の旅
三　絶海の弧島と西澤商店
○　西澤島
○　夢を追うて
○　大自然と神秘
○　灰色の砲鑑（ガンボート）
○　西澤神戸支店
○　長崎支店長、終局
四　赤道を越へて
○『実業之天地』創刊
○　移民問題
○　船　出
○　赤道祭り
○　上陸を前にして
○　ニューカレドニヤ島
五　鍬（くわ）を持つ男
○　藤枝へ
○　開　墾
○　坐禪と念佛
六　長江の畔
○　辛亥革命
○　出　発
○　上　海
○　南京へ
○　南京城
○　黄興副総統
○　漢口へ
○　武昌の黎元洪
○　終　章
七　マレーのゴム園
○　三五公司
○　門出の旅
○　現地の光景
○　マレーの三浦環
○　マレーの宗教
○　植林地
○　虚　無
○　K先生の出現
○　母の死
八　スマトラのゴム園・父の死
○　南洋ゴム
○　父の死
九　「生命の廃墟」をめぐって
○　シンガポールゴム会社
○　「濱辺に来て」
○　生命の廃墟の発想
○　「一念帰命」と「はしがき」
○　後篇の成立
○　終りに

一　日露戦争の後

○　政　局

明治三九年の春、文八は俘虜送還の任務を終了して除隊となった。

ポーツマス講和条約反対の全国運動に追いつめられた桂内閣は、三八年一〇月一五日講和条約を批准し、一一月一七日には、韓国を保護国化するための第二次日韓協約を結び、さらに一二月二二日には、清国と満州に関する条約を調印して、総辞職した。そして三九年一月七日政友会総裁西園寺公望が、首相の座についた。

小村外相の北京における交渉は難航した。遼東半島の租借権、南満州鉄道、安奉線鉄道及びそれをめぐる日本の利権問題であった。安奉鉄道は、日本軍が戦争遂行のために清国に無断で敷設したものであったが、その完成のために、鴨緑江の清国側沿岸の森林採伐権などをも要求していたのである。三八年一二月二二日に結ばれた日清条約とは、このような重要問題であった。

また一一月一七日の日韓協約のためには、伊藤博文が出向して、強制的に結ばせたもので、三九年二月一日、伊藤は初代の韓国統監としてその任についた。

○　小島好問の進退

前にも書いたように、遼陽の冬期防衛陣地構築の団長として出陣した小島は、奉天会戦後は、対島海峡防衛陣地構築に轉戦した。そして日本海会戦後は、再び満州に出陣して、安奉鉄道の完成に当ったようである。

小島は、三八年一〇月三日付で、軍用木材廠長を命ぜられて安東縣に赴任した。肩書は築城部本部部員のままであった。

日露条約、日清条約、日韓協約の成立によって、木材の使途が、戦後政策の方向にきりかえられたので、三九年五月一一日付をもって、築城本部部員を免ぜられた。

四〇年四月三〇日、陸軍大臣から木材廠長を命ぜられ、同時に内閣総理大臣命で、統監府営林廠長に任ぜられ、敘高等官三等一級俸下賜の辞令をうけた。ついで、五月一日任陸軍少将、五月二〇日陞叙高等官二等の辞令をうけた。鴨緑江の両岸から伐採される木材を一手に管理したのである。

四一年七月一日、願により統監府営林廠長を免ぜられたが、残務処理後韓国側にひき渡したのである。

四二年三月三〇日、陸軍の木材廠は廃止ときまり、残務整理後、東京に帰ってきた。四三年六月二九日には予備役を仰せつけられた。

○　戦後経済と大越成徳

戦後経済の課題は、経済の再建と満韓の戦後経営にあった。

戦勝の結果として、国民の企業熱が急速に高まってきたが、反面物価の騰貴は社会不安をまきおこしつつあった。

政府としては、早く一七億円にも達する軍事公債の整理償還のめどをたてなければならなかったが、国内の企業熱はそれを不可能にして

いたので、いきおい、金利の低い外債にたよらざるを得なくなっていた。

これよりさき、戦争中は、ロンドン公債市場で六分利付公債を二度にわたって発売し、やっと戦争をきりぬけたわけであるが、戦後再び日銀副総裁高橋是清らが、ロンドンに渡り外債募集に当ることになった。

同時に、その頃、日英シンジケートの設立が話題にのぼるようになった。文八の母方の伯父大越成徳は、前にも書いたように、外交官としての英国駐在期間も長く、それに夫人が英国生まれだったので、戦時中から、この外債募集に活躍していたので、このシンジケート設立に当たることになった。

除隊後文八は、五月頃から伯父のこの仕事を手伝うことになり、和装のかね子夫人同伴で、毎日のように、築地のメトロポールホテルを訪ねて、英国実業家を接待したという。

しかし間もなく、このシンジケート設立は中止になったようである。多分その頃すでに日本政府の国策と、満州の門戸解放を呼ぶ米英の資本との対立が始まってきたからであろう。

○　文学と宗教

全港堂の「婦人界」はすでに廃刊になっていたが、二九年三月には、博文館から田山花袋主筆の「文章世界」が創刊され、また三月二五日には、島崎藤村の「破戒」が出版された。自然主義文学の思潮が次第に高まりつつあったが、柳田国男や国木田独歩たちは、それに批判的であった。

文八が尊敬していた徳富芦花は、四月四日横浜を出帆し、イエルサレムを巡拝した後、六月三〇日にはトルストイを訪問し、八月四日帰国している。

「生命の廃墟」によると、無二の親友の一人三吉利三郎は、三九年春、文八の除隊をまたずして病没し、また尾花繁太郎は四〇年一月に病没した。尾花は除隊後、陸軍幼年学校の教官となり、結婚して、文八夫婦と親交をつづけていたが、三九年の暮、徳島に帰省したまま病没したのである。

「生命の廃墟」（三四二頁―三四三頁）に

年を越へて正月早々、僕は風邪にかかって臥床して居ると彼に通じたが、折り返へし、縷々とした情厚い見舞の辞を病床に受取った。やがてたってから、それとは逆に夢にも想はない彼の訃音（ふいん）が突如として寝耳に水の驚きを与へた。其悲しむべき通知に触れたとき、餘りの意外に食事も胸に通らず、終日茫然として、妻にさへいぶかしがられたくらいの打撃を、深く〳〵心の奥に銘した。

隠れた偉大なる天才O.Bが未だ世間にも認められずに、彼が常に思慕した樗牛の死する年輩にも達せずして、其尊とき有為の材を空しく故山の土に埋めたのを想ひ、多年鈍骨の僕をかくまでに愛してくれた知己の感に胸うたれて、僕は光を天の一方に失ったような暗愁に沈んだ。

彼の友誼は、実に宗教的情操にまで僕の心を高め、短かい其生涯の中

から、久遠の姿を長久に見出す、限り無き生命の脈搏を感ずるまでに到らしめた。僕は此友の霊を胸中に映ずる毎に、貧しい僕の一生にも、生き甲斐のあった其瞬間を想起して、法悦に近い霊感の溢れるのを感謝する。

嗚呼O.Bよ、僕は依然茲に不惑の域に致るまで蹌踉として東西南北の漂泊をつづけ、愚態さらに当年の旧阿蒙たるに過ぎないが、もし此一文にして、君の霊を聊かたりとも世に伝へることが出来たなら、貧者の一燈にひとしき供養として、幸に享けてくれ給え。

とある。この文は尾花の死後十六年の後に書かれたものであるが、この尾花の死によって、文八の自然法爾の道に生きようとする決意は一層強められたのである。

前にも書いたように、清澤満之によって親鸞の教を知ったのは、日露戦争中であった。しかしその頃は、彼の日々は俘虜収容所員であった。日々の生活のなかに、その宗教心を確認すればよかった。

しかし除隊後の彼の職業は自由に選択できた。毎日の生活に困らなかった彼は、ぼんやりと日々を過していたのである。尾花の死はその彼に痛棒を加えた。

人生如何に生きるべきか。自然法爾の道は行者の道である。しかしそれは智解を許さない道である。行者自得の道である。東西南北をぼんやり眺めまわしていても、何処にも見当らない道であった。ここから彼の放浪の旅が始まったのである。

二　道を求めて

○　台湾行

日清戦争後、台湾は日本の南進政策の據点になっていた。明治三一年二月二六日陸軍中将児玉源太郎が總督に、三月二日後藤新平が民政長官（後総務長官）に任命された頃からである。しかし日露戦争中は、児玉は総督兼任のままで、満州軍参謀総長として満州に転戦し、帰朝後は、国内の参謀次長、参謀総長と栄進している。

三九年四月一一日陸軍大将佐久間佐馬太が総督に任命され、児玉と交替した。この頃から日露戦争後の新らしい台湾統治政策が始まったのである。

四〇年春、文八は台湾に出かけた。この新天地に彼の理想を実現できる場を探すためであった。そこで彼は面白い人物に出会った。それは基隆に本店を置く、西澤吉次と言う豪放な商人であった。西澤は、無私無欲の世界を求めている文八青年に感激して、彼の台湾旅行を全面的に援助した。教育召集の日が近づいていたので、彼は他日の再会を約して帰途についた。帰路は西澤の長崎支店や神戸支店にもたち寄って見聞した。

帰京した彼を待ちうけていたのは、本籍地の静岡聯隊における第二回の演習召集であった。

五週間の召集生活を終えた後、彼は最近陸軍少将に任官した父を安東県に尋ねて見ようと思った。それに、よしや西澤商店に入社するにしても、その前に満州の新天地をこの目で見ておきたかったのである。

その旨を西澤にも報告して出発したが、西澤からは追いかけるようにして手紙が来た。

「生命の廃墟」（二三九頁―二三〇頁）

満州安東縣に滞在中、恩人のN店主より展書を受取った。今度南方のPと云ふ無人島を経営することになった。それは昔南T（鳥）島を発見したあの有名な探険家Mの漂着がもとになって、其手より譲りうけ、いよ〳〵自分の方で経営することに極めた。其島には天与の宝庫が無盡蔵で、主要物産の燐礦は勿論、オサ鳥、璃瑁、其他海産物が豊富に収穫出来る、其処までは、台湾の南端より、汽船で一昼夜半を出でない。（中略）君も満州旅行を終へたら、是非早く視察に行って見てはどうか……。（略）

とあって、すぐにでも飛んで行きたいように思ったが、まだ前途に満州旅行が残っていたので、その旨を西澤に返書したと言う。

○ 安東県

父は日露戦争中、人に知られぬ陰の防衛団長として活躍したが、やっとみとめられて少将に任官したのである。文八は朝鮮鉄道を経由して、安東県に到着して父の官邸に入った。そしてしばらくそこに滞在して、満州旅行の好機をまつことにした。

「生命の廃墟」（二四一頁―）に

僕は其地で一人の尊とき禪僧に逢った。彼は安東の市街を離れて、鴨緑江の流れを見下ろす風景絶佳　鎮江山と云ふ小山の頂きに観音堂を建立し、其堂寺をしながら草庵を結んで居る臨済派の修道者である。其寂びしき庵の中に超然として燕居し、そこに詣いる何人を問はず、總てに向って、親切なる應機説法を与へた。

夏の日盛りを、僕はよく其庵室で過ごしたことがあったが、清閑なる一間は、簡朴瀟洒な風致を以て整へられ、その一隅には佛典が推高く本箱に並び、中央には冬の日のために炉がきられ、其傍に経机がすへてあった。

（中略）

機鋒峻烈な臨済徳山の道風ではなく、日本の良寛和尚でも想はせるような、温かみに満ちたその禪風は、彼の全人格に、少しも無理のない解脱のあとをとどめていた。彼はさきに、台湾、福州に紀念多き垂跡を印し、今又この清韓両国の境なる安東に来たって、新しき心霊の殿堂を築きつつあるN和尚であった。（略）

とある。

このN和尚の存在は文八の心を探くうったようである。この人は満人の中にとけこんでいたのである。小島少将も時々参禅していたが、文八はこの人から「劫外」という法名を授けられた。その時、鉄樹花開、劫外の春の一句を、佛説遺教経の表紙裏にしたためて送られた。劫外の春とは永遠の生命を意味するのであろうか。青年文八の堅固な道心を励まそうとするものであった。

やがて秋が来て、文八にも仕事が舞いこんで来た。それは満鉄沿線の調査であった。小島少将が文八のために探してやったのであろう。

かね未亡人の話では、ハルピンから当時の大阪商船社長中橋徳五郎と同行したと言うから、その方面から依頼された調査だったかも知れない。

○ 旅順戦跡

安東から船で大連に渡り、そこで調査資料など準備のために数日滞在した。その間に旅順を訪ねた。

「生命の廃墟」（二四六頁―）に

或日旅順の旧戦場を訪ひ二〇三高地に登った。日露戦役当事の惨風を想ひつつ、感慨無量に打たれた。僕は旅順港内を一望の下に俯瞰して、其封鎖の任に当りし旧知Oの壮烈なる戦死の面影を偲んだり、黄金山、椅子山の激戦を徘想して、乃木将軍の心事を察したり、連想又連想に、空想の翼を馳せた。

山の絶頂から眼下に映ずる水師営南方高地には親友Nが奮闘力戦して斃れた恨事が残っている。僕の胸中にはあの精悍朴直なNと出征前に盃を酌みかわした一夜の想ひ出やら、昔麻布の聯隊の一室に起居を共にした当年の面影やら、さらに遠く過ぎし中学の教室に談笑したり、彼と柔道の道場に角逐したり、其特意な薩摩琵琶の石童丸を眼を閉ぢつつ悲想の声調で歌ふ声を耳にしたりしたさま〳〵の記憶が幻のように浮んできた。

彼は時代の風潮に染まない純潔生一本の性格で、学窓を出ててからも、其単純無垢の言動は、虚偽と軽佻とにみつる俗社會の空氣には、とかく入れられずして、常に悶々不平の情を抱いて居ったが、戦役勃発の声は、かえって彼をして蘇生らしめた感があった。一たび應召の令下るや、此勇敢なる時代の反抗兒は勇み躍って、時こそ来ったと腕を扼して征戦の途上に向ったのである。頑固な見かけに似合はない、情に厚く涙もろい彼は、生死交謝の巷を、愉快なる遊戯場の如く心得て、陣中から諧謔突飛の通信を寄せる中にも、常に至情の切々たるものがあった。

僕は彼の勇戦激闘して敵弾に当り、二十六年の短き生涯を、国家の犠牲に葬った壮烈なる最後を想って、水師営南方高地から長く眼を離すことが出来なかった。

しかし浮薄なる世に迎合することのできなかった彼にとって、噫、其死は、寧ろ意味あるものではなかったらふか。

とある。

Nとは親友だった中川尚次である。文末の一句は、亡き友をいたむと共に、安東の一角から当時の満州の空を眺めていた文八その人の感懐だったのである。

○ 長途の旅

文八が安東県の父の官舎にしばらく滞留していたのは、何か重大な意味があったようにも思われる。何故ならば、その時期が重大な国際関係の転換期であったからである。

日本政府は、明治二九年一一月二六日南満州鉄道株式会社の創立総会を開いている。しかし、清国及び欧米列強の反対をおしきって南満

州の利権を確立するためには、むしろ北満州の利権をロシヤにゆずって日露協商を結ぶ必要があると考えるようになっていた。

ロシヤもまたその同盟国フランスと共に、当時急速に抬頭しつつあったドイツの野望を恐れて、東洋方面の安定を望むようになりつつあった。

明治四〇年六月一〇日日仏協約、七月三〇日には日露協約が成立し、八月三一日には英露協定が成立した。中橋徳五郎をはじめ日本の実業家たちがぞく〳〵満州にやってくるようになったのはこの頃からであった。

「生命の廃墟」（二六七頁）には

大連を去って営口・遼陽・鉄嶺・奉天・昌圖・長春の各地に歴遊し、更に東清鉄道にて哈爾賓（ハルビン）に到り、所要の調査を遂げてから、西比利亜（シベリヤ）線の列車に投じ、浦塩斯徳（ウラジオストック）に出で、領事館のSの官邸に滞留して、後鳳山丸に乗り込んで、日本海を越へ、僕は敦賀より東海道線を経て、東京にはじめての長い旅行の行装を解いた。

とある。

前にも書いたように、ハルピンから敦賀までは、大阪の中橋徳五郎と同行したようである。また、かね子未亡人の話では、当時鉄嶺の領事矢野恭太郎の夫人てい子は、文八の母方の従妹（根津氏）であり、ウラジオストックの領事鮭延信通は、二人の媒酌人だった鮭延良治の弟だったと言う。従ってさまざまな想出があった筈である。

しかし後に「生命の廃墟」を書いた時、それらはすべて抹殺され、安東のN和尚の話と旅順で戦死した親友の中川尚次の追憶のみが感動をこめて書き残されている。

当時満州でうごめいていた政商たちの姿は、彼にとって我慢のできない存在だったのかも知れない。そして夢は、すでに南方の無人島にはせていたのであろうか。

三　絶海の孤島と西澤商店

○　西澤島

前章でP島と書かれていたこの島は、北緯二〇度四二分三秒、東経一一六度四二分一四秒にある無人島であった。東沙群島中の一孤島であったが、当時はまだ領有権問題もなく、彼らは、プラタス島、または西澤島と呼んでいた。強いて言えば台湾総督府管轄であった。

「西澤島の記」（一大燐礦石の発見）によれば、これは明治四一年に文八が書いたものであるが、それによると、西澤吉治が、この島に渡るべく基隆港を出発したのは、四〇年八月九日だった。文八が安東で手紙を受取ったのは、この少し前かも知れない。

一行は、台湾人六〇余名、琉球漁夫三〇余名、その他事務員、船頭、大工等百二〇余名であった。彼等をのせた四国丸は、八月一二日はじめてこの島に到着した。

すぐひき返した四国丸は、再び、建築材料や食料品をのせ、医師、船大工、労働者らをつれて、九月一五日に、補強要員を送り込んでいる。

かくして店主西澤が陣頭にたって、彼のいわゆる国家的大事業が始まっていたのである。

○　夢を追うて

長途の旅から帰った文八は、間もなくP島に向って出発した。四〇年一〇月の半ばであった。

「生命の廃墟」（二四九頁ー）によれば、

帰朝後神戸のN支店に赴任すると間も無く、かねて空想に溢れて居た無人島Pの視察へと出発することになった。

肥前の唐津まで汽車にて陸行し、呼子港に廻船する傭船第三丁丸に便乗するはづの僕は、或日の夕、其醇朴なる昔の船泊りを想はせるような港の、ある旅館に到着した。

（中　略）

基隆に投錨し、荷役にいそがしいT丸から上陸して、本店主任のNと会し、共に台北に赴いて其友情厚き歓待をうけてから、汽車にて南部の打狗に陸行し、そこに廻航し来るT丸の到着をN出張所で待ちうけた。

打狗の港を出帆し、P島に向うT丸は、途中、燐礦採掘苦力の集団を積み入れるために、膨湖島に寄港することとなって、あの全島はげ山ばかりの要塞地に繋船し、沢山の台湾労働者の群を集めて、後普通の航路とは全然方角を異にした、危険の多い外洋の眞只中に乗り出した。

羅針盤は香港から馬尼剌に向ふ航路線の方を指し、一昼夜半の浪荒い航海をつづけつつ、船長は精密なる注意を以て、その附近に暗礁の多い絶海の離れ島を、海図の上に辿って行った。

「もうプラタスに近寄りましたよ。」と船長に言はれたので、急いで甲板に出で、船橋の上に昇って、はるか沖合を展望すれば、一條の濛々たる水烟が蜿蜒として天に冲して居った。近づくに従って、それは海面に露出した礁脈の線であることが分った。

滔々として押し寄せる激浪が、さながら怒馬の陣を衝くような勢に、

礁脈の巌面にぶっかっては跳ねあがるので、水沫が霧の烟を上げつつ渦巻いて散乱した。その向ふに范乎として水か陸か見分けのつかないような黒い線が微かに海面に現はれ、其前面には一連の礁脈が馬蹄形をなし、天然の防波堤を築いて居った。それは目的地なる海面を抜くわずかに二十尺のP島であった。

（中略）

○其処には社宅兼用の事務所、医務室、倉庫、労働者の共同宿舎などが集まって居って、電話線が海岸の方へずうと延びて居るぐあいは、絶海の孤島に珍しい設備の完成を示した。

二人の事務員が執務して居るそばの椅子に坐った此島の経営者なる店主のNは、如何にも、かかる壮快な男性的事業家にふさわしい偉大なる体軀と魁偉なる風貌のうちから、烱々たる眼光を放ちつつ、愉快げに、

「やぁKさんよく来た。僕は今度の便船でちょっと台湾に引挙げるから、君将来のため、此次ぎの来船まで、ゆっくり視察と研究をとげてくれ給へ。」

そう言って事業経営の経過や将来の抱負を語った。

とある。

こうして文八は、あこがれの孤島にたどりついたのである。客人待遇であった。

○ **大自然と神秘**（二五七頁ー）

僕は調査や研究の餘暇には、ときどき漁夫を連れて沖へ漁に出かけた。晴れた朝の海に丸木船を浮べ、小さな杓子のような櫂で水を漕ぎわけながら随分遠くまで乗り出し、水沫の飛びちる礁脈の傍にさへ近づいて、半日ぐらい釣を垂れたり、水に潜ぐって魚や海亀を突いたりした。

或日僕は取締のHとドクトルと三人で遠く外洋へ漕ぎ出し釣をやった。細引に近い太い糸のさきに、釘を曲げて針の代用とし、魚の切り身をつけて水の中に投げ込むと、眼の下二尺以上もある大物が、のべつに引きかかる、不器用な僕にも餘りたやすく釣れるので、しまいに飽気なくさへ思はれた。

それから眼鏡をかけ、銛をかい込んで海中に潜り、魚を突いたが、これはなかなか難しくて、見当が外づれて、僕やドクトルは、いつも落第であった。身体の廻りや頭のすぐ上を、大きな魚が群がって通ると、ハッと想って変な手つきをしながら、銛をなげる。それが蒼々とした水の波紋を描くばかりで、ねっから手答へがない。しかしHは八丈島出身の経験家だけに、十発十中見事に仕止める。其日の収獲で最も傑出してゐたのは、全長五尺もある海亀二頭であった。捕獲する度に、僕たちは悦んでホウホウと叫びながら船の中で躍り上った。

渺々たる玄洋の青海原に潜って、夢中に魚を狙ふ瞬間の僕たちには、文明も社会も、宗教も道徳も、権勢も栄華も、功罪得衷も、あらゆる人為の創造はことごとく忘逸して、ただ大自然の虚無の中に、無意識なる生命の躍動を感ずるばかりであった。

夕暮独り寂みしき孤島の周囲を徘徊すると、夕陽は既に水平線に没し

て星は天に爛めき、岸辺を洗ふ浪は足もとの渚に砕ける。茫々たる沖合には、水と空との外何一つ眼に映ずるものがない。砂原に腰をおろし、静かに黙想すれば、どんな人でも深い哀愁の感に沈まずには居られない。真の寂びしみと云ふことが、ひしひしと身に迫まる。僕は南洋の山中でも満州の曠野でも、未だ此P島の夕暮ほど幽寂な感にうたれたことがない。

永劫の宇宙に眇たる人間の姿がはっきり見えて、無始劫来の哀しみ、それは有限に名づくべからざる心の響きで、

「ああ！　人は大自然の螢然たる孤児なり。」と言うような気分にひき入れられる。だが其刹那ですら、心の奥にはなにか甘い愛の調音が漂って来るように思はれた。

とある。

十余年の月日がたっても文八にとっては忘れがたい感動であった。人間は孤独である。現世の雑念は妄執にすぎないと。

○灰色の砲艦

「生命の廃墟」（二六一頁）

かかる絶海の離れ島では、船の来着ほど楽しいものはない。人々は寄るとさわると「何時船が来るだらふ。晩いじゃないか。」そんな話が洩れる。あの謡曲に書かれた鬼界が島の俊寛のことなど心に浮ぶ。しかしこんな普通の航路を離れた所には、海岸に出ても外国船の烟一つ見えない。

それが或日、僕が事業区域を一巡して、渚にたたずんで居ると、遙かの沖合に細々と一條の烟がたなびいて、だんだん此島に近づいて来た。すると海岸に働いて居た誰もが、T丸出帆以来首をのばして待って居たので、ひとしく其方角を熟視し、

「やぁ、船が入って来る。とうとう来たぜ。ありがたいなあ。」

そうして喜びに溢れた。

普通、遠洋航路の社外船としては、どうも小さいようだな、と僕も胸躍らせつつも、内心不審に想って居ると、やがて岸に近く入って来たのは、当てが外づれ、灰色に塗られたアメリカの砲艦であった。

「オヤオヤ」とみんなが失望に陥ってしまった折柄、海軍將校や下士らしき乗組員が四五人、ゾロゾロと上陸し、事業設備の完全に不思議な眼を見張りつつ奥に進んで来た。彼等は取締のHと共に島を一巡して引きあげたが、それはマニラより廻航の途次此島の様子を見に来たのであった。

僕が滞在四十餘日の後、傭船のF丸が入港した。既に視察や調査も終ったので、いよいよ此島を離れることとなった。

とある。

文八はあまり意識していなかったようだが、この査察は、アメリカ本国にも報告されたものと思われる。だからこの企業の風聞は、やがて国際社会の噂さとなり、後には清国との外交上の問題としてとりあげられたのである。

○○　西澤神戸支店

島から帰った文八は、西澤吉治の人がらに感動して、請われるままに、夫人をも呼びよせて、神戸に定住するようになった。明治四一年になると、早稲田文学二月号によって、田山花袋の「蒲団」が推讃され、四月七日から、東京朝日に島崎藤村の「春」が連載され、四月一三日から、花袋の「生」が、読売新聞に連載された。六月二三日文八が敬愛していた独歩が死亡したが、彼はお悔やみの金は送ったが、東京には出てゆかなかった。当時の文壇の動向は彼にとってむなしいものとしかうつらなかったのである。ただ四〇年二月二七日、東京郊外千歳村に隠棲した徳富芦花のみが慕わしかった。

日露協商を背景にして動きかけた満州の企業には目もくれず、親しくなった大阪財閥の巨頭中橋徳五郎にもすがろうとしないで、ひたすら絶海の孤島にかけつけた文八であった。しかしその島にいたのは四〇餘日で、今は神戸の町で、一営利会社の店員となっている。ふと、これでよいのかと考えることもあったらしく、清澤満之の高弟暁鳥敏に手紙を出している。その時の返事。

「生命の廃墟」（三六五頁ー）

暁鳥師から賜はった書簡の中に、今尚ほ忘れがたき一節がある。

十八日帰洞。四日に御認めの御文、拝見仕つり候。先以って慈光の下に、御健祥に御暮しあそばされ候段、ありがたく存じ候。御縁によりて一度は御面晤の期を得る事ならんと存じ候。時を同うし、国を同うしながら、兄と我と、とかく會合の縁なきを思ふにつけても、世を隔て界を異にせる淨那の如来と、朝夕に會ふことを得る事、不可思議の因縁と尊まれ候。

御文は杜翁の生活を羨むと言うことこれあり候も、こは賢慮の一失と存候。杜翁は杜翁にてよかるべく、KはKにてよきにあらずや。青き色には青き光あり、白き色には白き光あり、佛の光は種々の人格の上に、その個性を没せずして光を放ち給ふ事、うれしきことにはあらずや。生は釈尊や親鸞上人や、近くは清澤先生を尊み候、渇仰いたし候、敬慕いたし候。されどかかるけだかき人格を、自分に得らるべしとは思はず候。随って羨みいたさず候。敏は、この怠惰なる敏、愚昧なる敏は、清澤師とも親鸞上人ともならずして、敏のこのままにて光明に摂取せらるること、尤もうれしく候。故に今日にては杜翁も其他の偉人も羨しからず候。凡夫は凡夫相應の、今日の生活の上に、絶対の光明と本願とを認めて喜び居り候。個性の尊厳とかいふ事も申され候が、生は個性此のままの上に、降り給ふ救済の光明を、ありがたく思ひ、念佛いたし居る事に候。慈光の下に。（平易に書改めた。筆者）

此書状は、僕が戦後神戸在住時代に、A師より頂いたもので、当時、そのままの御救ひを會得するの上にありて、大に力あったものである。とある。

未知の人だった暁鳥に、自己の生活批判を求めたのである。それだけに、自ら選んだ道に不安を感じたのであろう。しかしこの後は、信仰に生きる一会社員として、一途に生きようとしたのである。

○ **長崎支店。終局。**

「生命の廃墟」（二六三頁―）

後に僕が帰朝して、Nの長崎支店を管理して居る頃、此島の事業はますます進展し、T總督府から、学者や吏員が視察に派遣されたことがあって、豪懐不羈なNが、全財産を投じ、思いきった経営振りは、当時、世間の眼を驚かしたが、遂に支那との外交問題が起り、其結果は、若干の償金を取りて支那の領土に帰し、あの墨痕淋漓と記るして、島の小高き所に立ってあった、雄渾なN島の本標も、紀念すべき我が日章旗も、共に見ることが出来なくなった。

とある。

文八の無欲な人柄が高く評価されて、八月には長崎支店長となった。

これより先、澳門港に入った日本汽船第二辰丸号が、革命党員に武器密輸入の疑で、官憲に抑留された。当事革命党は、黄岡の変（明治四〇年五月）、防城の変（九月）、鎮南関の変（一二月）、河口の変（四一年四月）と連続的蜂起を試み、日本の志士宮崎滔天らが呼応して武器密輸を企てていた時代であった。

また同じ頃、孫文らは、フィリッピンの革命党員とも気脈を通じていた。フィリッピンはアメリカの統治下にあったので、アメリカの官憲もまた目を光らしていたのである。

明治四一年一〇月二五日、日米の間に、太平洋問題及び清国における機会均等主義に関する協商がとりあげられるようになり、一一月三〇日、太平洋方面に関する日米協定書が交換された。

太平洋方面における現状維持と清国の領土保全、商業上の機会均等主義の確認であった。第二次桂内閣は、満州を中心とした北方政策のために、台湾総督府が後援していた南方政策を放棄したのである。その結果、東沙群島中の西澤島も清国の領土と確認されたのである。

西澤島に全力を注いでいた西澤商店は、この時その活力を奪われたのである。ついで社主西澤吉治が死亡したので、文八も会社をやめることになり、孤島にかけていた夢は永久に消滅してしまったのである。

四　赤道を越へて

○『実業之天地』創刊

西澤商店を退職して帰京した文八は、先輩の祖山鐘三を助けて『実業之天地』を創刊した。

発行兼編輯人　祖山鐘三

印刷人　小島文八

印刷所　東京牛込株式会社秀英社第一工場

発行日　明治四十二年六月十五日

発行所東京市牛込區納戸町二十七「実業之天地社」

発行所の納戸町は祖山の自宅で、文八は泊まり込んで、その仕事を助けた。雑誌の内容を見ると、当時の青年男女にむかって新時代にふさわしい新商人道を説こうとする方針であったらしいが、発売が思わしからず、創刊号で終ってしまった。

祖山鐘三は、一橋商業出身の秀才で、卒業後洋行して、帰朝後一時は一橋高商の教授をもしていた学者であった。文八がこの人と知りあったのは神戸時代で、「背の高い、眼鏡をかけた聡明な容貌で、率直に物語る様子や、天真爛漫に振る舞ふ其行動は、実に慕わしかった。」と言っている。

しかし、二人とも善良で空想家だったために事業には失敗したようである。

○移民問題

今年、和年五三（一九七八）年は、ブラジル移民七〇年記念式典が花々しく行われた。つまり明治四一（一九〇八）年六月一八日は、サントス港に、最初のブラジル移民船「笠戸丸」が到着した記念の日であった。一六五家族、七九一人が渡ったという。

せまい国土に、多数の人口をかかえた日本では、早くから移民問題が真剣に考えられていた。秀英舎の初代社長佐久間貞一などは、明治三〇年頃から、同志と移民会社を作って、この問題ととりくんでいた。

最初はハワイやカリフォルニヤなどが中心だったのだが、日露戦争後は、アメリカで急激に、日本移民排斥運動が高まってきた。そのため外務省では、明治四一年一月二五日、移民停止を決定している。そしてそのかわりに南米移民が始まったのである。

文八が東洋移民会社の業務代理人となり、千餘名の移民団をつれて、佛領ニューカレドニヤ島に渡ることになったのは、明治四二年一二月であった。ボーキサイドの鉱石を掘る鉱夫としての移民であった。

文八にこの仕事をもちかけたのは、「実業之天地」印刷で知りあった秀英社二代目社長であった。社長夫人は、当時の日本鉱物学界の大先達和田維四郎の娘であり、和田は後に三菱金属鉱業や八幡製鉄所とも関係をもった人である。

ニッケルの原料としてのボーキサイドの輸入問題がこの移民問題とからんでいたのかも知れない。フランス語のできる人として文八が選ばれたのであろう。西澤島の夢が、忘れかねて、彼も喜んでひき受けたのであろう。

○船　出

「生命の廃墟」（二〇一頁ー）

十二月の風寒き夕、一艘の大きな汽船が檣頭に日章旗を飜へしつつ、神戸の沖合に碇泊して居った。そこへ近づくランチの中から、ゾロゾロと大勢の人が舷端の梯子をよじ上って行く。そのうちに、外套を着てソフト帽を載いた一人の男が交じって居る。それは僕だ。

澤山の労働者らしき群が、甲板の上に右往左往して居る。そこへ件のランチから現れた連中が、やがて次ぎ次ぎにサロンへと降りて行った。花やかな粧飾が室一杯に施された大廣間には、美しい花が卓の上に咲き乱れ、紅白の色を風にひらめかした、小さな各国の国旗がひらひらと天井に踊って居った。

卓の周囲に並んだ人々の中から幾人かが起って、代る代る挨拶を述べ、僕も簡単に答辞をすますと、一同はシャンペンのグラスを挙げて乾杯し、ランチでは洋々たる音楽隊の吹奏が起った。

やがてサロンの群は、僕の外に一人の紳士と二人の青年とを残して引きあげたが、このとき日足の短い冬の光線は、だんだんかげって、空はどことなく雨模様に見えた。

（中　略）

それは、僕がある移民会社の業務代理人として、二人の助手と共に、千有餘名の移民団を引率し、濠州の辺りなる佛領ニューカレドニヤ島に渡航する夕であった。船は三千餘噸の社外船K丸で、此一行の中には、外務省より視察に派遣された役人のKも乗り合はした。

（中　略）

K丸には鹿児島（弁）の態度悠揚たる老船長Y、よく肥へた口髭の白い機関係、凜とした姿勢の太り肉な若い一等運轉士、痩さ形の愛嬌のいい一等機関士、それから小柄で骨太の始終にこにこして居る事務長のM、白面痩軀のドクトル、こうした高級船員たちが居って、だんだん一行と心易くなった。

（下　略）

とある。

当時の移民問題は、国家的事業でもあったので、外務省からは視察の名目で役人が同乗したのである。時に文八三一才であった。

船は小笠原群島からカロライン群島にむけて進んだ。移民団は日本全国から集められた人たちであった。

「生命の廃墟」（二〇五頁ー）

国々の気風や習慣を異にする、多くの無智な連中を統率して四十餘日の航海を続けるのには、僕もいろいろと心を配って骨を折ったが、都合よく各縣の代表者には軍籍に関係あるものを選んで置いたので、後備士官たる僕の命令や指揮はよく尊奉され、幾分か軍隊式を加味して、さらに寛大に取扱ったところから、千有餘名の各縣移民も至極円満に、毎日の餘興にうち興じて日を過ごした。

殊に、Y船長は移民輸送に経験もあり、且つ萬事に用意周到なる注意が行き届き、移民等は一層の満足を感じたばかりでなく、我が一行の人々も多大の便宜と援助とを得ることが出来た。加ふるに外務省役人のKも同行

であったと言うことは、統率の上に餘程の威信を加へて行くことにもなった。（つづく）

とある。

船はブラジル移民団を送りとどけた笠戸丸だったのかも知れない。文中に「多くの無智な連中云々」とあるが、明治三三年になって小学校四年の義務教育が施行されたと言う当時の日本だったからである。千有餘人の大衆を統率するために軍隊式統率を加味したのは文八の才覚だったのである。しかしこのために最後に小さな叛乱が起ったようである。

（つづき）

中でも多くの移民の間で、沖縄人と福島県人とは、非常に従順に、仲間同志の折合もよく模範的に見へた。

朝からいろいろの餘興が催され、沖縄人特有の踊りやら、それぞれ各地方の異なった手振りの盆踊やら、診しい光景が日毎に甲板を賑わした。とりわけ福岡から来た彼等の中に、舞ひの名人が居って、わざわざ故郷よりもたらした本式の衣裳をつけ、假色交りに舞台を踏む様子は、頗る見ものであった。（略）

○ 赤道祭り

「生命の廃墟」（二〇八頁ー）

いよいよ赤道も間近かに迫って来た頃は、赤道祭の準備で、各縣人とも、われ劣らぬように、さまざまな趣向をこらし、其練習やら稽古やらで、どの船室も非常に景気づいた。

遂に其記念すべき朝が到来し、其日は甲板の上に一同を整列せしめ、中甲板の小高い所に僕たちは陣取り、粛然と儀式を催した。

今でも眼に残る其朝の光景。

船長始め高級船員は、何れも金モール燦然たる整装に帯勲し、役人のKはフロック、僕は其日だけ、わざと持参した軍服に着かへ、日露戦争当時の紀念を胸にぶらさげたのは、むしろ滑稽であった。

一同時刻を計って列席すると、間もなく盛んな汽笛の続いた号聲が鳴り響き、赤道通過の合図が人々の耳を劈く。最初に船長の挨拶、次ぎにKの祝辞。それから僕の順番がすんでから、移民団の代表者が、一人恭々しげに壇に上り、其髯の濃い背のすらりとした黒広廣を着た男は、慄へた聲で、をそるをそる祝辞を朗読した。

式の最後には、僕の発聲で萬歳を三呼し、一同の大音が蒼海原に轟き渡った。空はよく晴れて、浪も穏やかに、強い日光の直射は、ギラギラ人々の頭の上を射りつけるようだ。

式が一通りすむや否や、下級船員の假装行列が、芸者だの、軍人だの、達磨だの、坊主だの、其外種々様々な扮装で、滑稽至極な身振りや、足どりをしながら、ゾロゾロと甲板をねり歩く。中にも赤道の神に扮した其姿は殊に異彩を放って居った。

さて赤道祭の餘興にかかると、各県の診しい芸当が代る代る熱心に演ぜられる。そのうちで福井人の獅子舞と、福岡人の芝居が、殊に人々の眼をひいて、一同は夕暮まで楽しく笑ひ興じた。餘興の間に、一寸、福

井と福島とが、芸事の順番争ひから、小ぜりあいをやりかけたが、僕たちの注意でそれもすぐ丸く納まり、いよいよ夜の酒宴に移った。（略）

とある。

この赤道祭りのあらましは、船長らの指導によるものと思われる。しかし長い航海で人々の心もすさみ勝ちだったので、指揮者としての文八の心づくしも加わったものと考えられる。彼は移民たちの心の奥に、この日を永久の思い出として残したかったのだろうし、彼自身のためにも青春の紀念として残したかったのだろう。

○ 上陸を前にして

船はローヤルテー群島のあたりを過ぎ、夕暮の美しいニューカレドニヤ島に近づいた。やがてフランス人のパイロットがやってきて真夜中にチオ湾に投錨した。

翌朝、フランス人の検疫医やニッケル会社の役員たちがやってきた。しかし首府ヌメアから上陸に関する政庁の指令が到着していなかったので、上陸は延期になった。移民たちがさわぎはじめた。

「生命の廃墟」（二一四頁―）

ランチが去ってから、上陸延期に対する口実を種とし、移民中の生意気な二三の連中が煽動して不平の聲を鳴らしはじめ、船中ここかしこに不穏の徴候を現はした。長い航海の幾日かを、無事円満に滞りなくすましてきたこの最後の一時に、かかる面白からぬ形勢を見るのは、実に残念に想はれ、僕たちはどうかして、よく納得の行くように鎮めようと、代表者たちを一堂に集めて説明訓示に努めた。

しかし、何か事あれかしと苦情の種を捜がして居た、岡山移民の一人なる労働者らしからぬ小役人あがりとかの男が、殊に先に立ち、三百代言的な口調で、屁理窟を並べに来たりして、訳のわからぬ無知な連中を一層いらだたした。（つづく）

とある。

文八は気づいていないようだが、軍隊帰りの若い下士卒を臨時の代表者にした統率が、一般社会の通念としての上下関係を無視してきたため、小インテリをいらだたせて、最後にこの不平不満となったのであろう。

（つづき）

外務省のKも彼等に醇々と安心を与へるように説得を加へたり、船長のYも非常に骨折って、停船中、移民たちの無聊を慰さめる趣向をこらしたり、様々な方法を以って無意味に騒ぎだそうとする沢山の人間を、上陸するまで平和に治めようと尽力した。

移民たちの中に、僕が船中で殊に手馴けて居った廣島と福岡の元氣な若衆が二人居って、彼等は遊び人あがりの哥兄肌ではあったけれども、意気に感奮する任侠的な性格から、僕のために水火を辞さないと言う意気込を示めし、此時の出来事には、熱心に各室を廻はって鎮撫にさへも力を添へた。

至極円満な福島縣移民は団結して騒擾の仲間を外づれ、若し不穏のことあれば、統率者たる僕たちのために充分の労を厭はないと聲明して、

わざわざ代表者をよこしたりしたが、他にも沖縄移民もまた別に調子づく様子が少しも見へなかった。

入港した二日目の晩に、まだ指令がこなかったので、其夜の形勢は、刻一刻にますます不穏の徴候を加へ、殺気だった騒擾的気分が全船にみなぎってきた。そこで萬一の暴挙に備へるために、船長の指図でサロンの警戒が厳重に加へられ、絶へずボーイたちは移民船室の偵察に心を配ばることにもなった。

しかし、僕は、どうせ雷同した彼等のやることはたかが知れて居ると想って居たが、それでも、若し怪我人でも出してはと、多少の不安もあった。

夜半近くまでざわざわして居た本船の方へ、暗を通うして一艘のボートが漕ぎ寄せられたかと想ふうち、角燈を提げた一人の佛蘭西人がサロンに現れて、明朝未明より検疫開始、続いて上陸をさせることになるとの報道を船長にもたらした。

暗雲は一時に開いて、各室の代表者は、直ちに呼び寄せられ、僕より一同への上陸に関する諸般の注意と命令とを布達した。それから取締は一層厳重にゆき届いて、各室の移民たちも漸く沈静に服することとなった。

とある。

ここには日露戦争後の日本人の群衆心理がよく描かれている。戦争に勝ちながら一銭の償金もとれず、社会的経済的不安からはじき出されて、今移民として渡ってきたのである。しかも戦争中ロシヤに加担したフランス人が、今不合理にも、彼等の上陸を拒否しているのである。そして若い統率者の文八は、フランス人に何の抗議もできず無能ぶりを露呈していると考へたのである。かくして文八の軍隊式統率は、もろくも破れたのであった。

しかし、かってロシア人俘虜の群衆心理を洞察した経験もあったので、文八は、つとめて移民たちの心を鎮静させるべく努力したのである。

○ ニューカレドニヤ島

「生命の廃墟」（二一七頁―）

いよいよ夜明けになると、再び大勢の佛蘭西人が、ランチから本船に移って、サロンは多くの人で混雑する。検疫と上陸に関する話が一通りすんでから、移民名簿を彼等の手に交附した。

よく肥へた大柄の支配人に続いて、ラテン型を完全に現はした痩さ形の副支配人、それから人のよさそうなにこにこした老人のドクトル、外に若干の佛蘭西人を交へて、此地の移民監督に長らく専任して居る旧知の友人Mが先だち、サロンでの要談は、それからそれへと順序よくはかどっていった。

Mは殊に久し振りで故国の船を迎へることに、非常の歓喜を以て、元気よく僕たちに語った。好天気の朝まだきから、甲板で逐次に一同の検疫が行はれ、一人の重症患者を残すの外、移民の大集団は続々、それぞれ分割した作業地へ大きな艀船で運ばれることになった。

いざ上陸となると、彼等もさすがに、この船に名残惜しそうな様子で、中にも船中で僕に懐いていた連中は、艀船が本船を離れる間際には、幾度か「御機嫌よろしく」を繰り返へしながら、手拭や帽を振って別れを惜んだ。

（中　略）

なんと言ふ麗しい島の様子だらふ。岸に生へた一面の椰子樹は墨々として実を結び、蒼々とした原始的の葉が、海から吹き寄せる南風にそよいでゐる。桟橋から続く一條の鉄路は、緑や紅の熱帯の樹木の間から、遠く町の方に蜒々として延びている。桟橋の上には、ニグロに似た、真黒な体格屈強で、背高きカナック土人の群れが、半裸体のまま、妙な顔つきをしながら、我々の一行が上陸するのをジロジロ見守って居った。そこには玩具のような可愛い汽車が烟を吐いて居たが、一同はそれに乗り込んで町の方に向った。

蜂の巣のように蕭洒たる植民地風の家屋が沢山列んで居る町の入口で汽車を降りてから、僕たちは会社の事務所にゆき、一通りの要件を果たして、さらに船長の一行と共に、支配人宅の昼餐に招かれた。（略）

とある。

Mは外語のフランス語科以来の知人だったのであろう。ヌメアの町は、南緯二二度五分東経一六七度にある。ニューカレドニヤの中心地であった。文八はこの島の美しさに心うたれたようである。

労働者が不足していたからかフランス人たちは、文八たちを心から歓迎してくれた。支配人の壮麗な社宅を辞した後、Mの案内で副支配人の社宅を訪ねたり、病院に移民の重症患者を訪ね、さらにドクトルや二人のフランス人技師の宅をも訪問している。フランス語の世界にきて、文八も何となく楽しかったようである。しかし、

町に出て散歩しながら、とある一軒のバアーを覗いて見たが、それは活動写真のフキルムにある、西部アメリカのアリゾナ辺にでも出て来そうな、蛮気に満ちた光景で、中には荒くれた佛蘭西人の労働者なぞが、粗末な衣服の胸をはだけて、大聲で歌ひながら飲んで居る。其群れの間を縫うて怪しげな化粧の女が徘徊して冗談なぞを言ふのが往来にまで聞えた。

其夜、僕は分かれて会社専属のホテルにゆき、外務省のKと一緒に泊り合はした。

と結んでいる。

ニューカレドニヤの大自然は美しかった。しかし、そこに展開されている殖民地風の人間模様を、文八は、はたしてどのように受けとめたのであろうか。

五　鍬を持つ男

○　藤枝へ

明治四二年三月三〇日、陸軍の木材廠は廃止ときまり、廠長小島少将は退職、残務整理を命ぜられている。これより先、四一年四月に中日合弁鴨緑江採木公司章程が定められている。小島少将と東三省の代表者徐世昌との交渉によって作られたものである。今、日本軍の手からこの民間会社に渡されたのである。

小島少将は穏栖の地を藤枝と定めた。静岡県志太郡西益津村田中一五五であった。四二年五月には藤枝小学校と益津小学校に寄附金を寄せているからその頃土地の買収も決定したのであろう。

「生命の廃墟」（一二二五頁―）

ひと頃、僕は駿河のかた辺にひきこんで居ったことがあった。静岡駅から西へ汽車で五里、あの日本武尊の東夷征伐に因縁のある焼津の停車場を降りて、田圃続きの街道を伝ひ、瀬戸河の流れを越ゆると、しばらくにして松並木の向ふに、田中の古城跡が小高く畑地を扼し、水田を隔てて村の小学校の建物が眼にうつる。

田中の町に入ってから、昔の東海道につづく藤枝の本通りへ出ようとするはづれの一角に、もとの郡役所敷地あとを譲りうけ、小路から小路へ千坪ほどの地域を、黒塀や生垣に取り囲まれた一軒の建物、それは、父母が満州から帰朝して以来の穏栖であった。（つづく）

とある。

明治四三年六月二九日、小島小将は豫備役となり、安東県から帰京して、この地に穏栖したとあるから、それまでに、この新宅もできあがっていたのであろう。

（つづき）

僕たち夫婦も、一時東京を引き上げて、其地所内の別寓に蝸居し、或年を暮したことがある。それには或事情もあったが、一つは其頃僕の心には、非常に都會の空気を嫌厭する情が起って、ひたすらに山村の生活に憧れたのである。

田舎には田舎の因習的暗流が潜んで居るのも知らず、無暗に田園の人をのみ理想化し、ちょうど大袈裟に言へば、ヤスナヤポリヤナに穏栖したトルストイのような心持を真似、一切の世間的仕事と絶縁して、静かな生涯に、生の解放を味ひたいとの、現実にうとい夢想からの人生観にひっ張られたのに過ぎない。

そこでは僕の空想が見事に周囲の空気から裏切られて、其後再び都会に流されて来たのではあるが、当時の短い生活の片鱗を今ならべてみよう。

とある。

二、三年は、嫁と姑を同居させておいた方がよいと言う好問の理想と、トルストイの夢を追う文八の理想とが合致したのである。

「生命の廃墟」（一二三三頁―）

新しい眼を開いて下された清澤滿之先生の遺著や、それから以後、如何なる心の動乱の中でも、刹那も離れることの出来ない聖親鸞の御教へによって、絶対他力の信仰は永劫に失はない積りであったけれども、自

我愛着の熾烈な僕は、そうした信念の中からも、理想の彷徨や心の巡霊を絶へず続けながら、生死迷悟の岐路に憐むべき醜体をさらして居った。とある。

これは、この頃の心境の一部であった。

○開　墾

「生命の廃墟」（二二七頁―）

藤枝長楽寺の町から、街道を越へて畦道伝ひに奥へ奥へと進んで行くと、谷一つ隔てて、向ふに蜒々たる峯が一帯に続いて居って、其山林の内に撰んだ僕のささやかな開墾地がある。山全体に灌木の雑樹が生ひ繁り、傾斜面の下を小さな谿流が流れて居る、峯は富士見平に連って、頂きからの風景は、かなりに印象の深いものであった。

其処を開墾し、駿河名産の柑橘を植えることにきめたので、僕は毎日園丁のKと、臨時に雇った近所の百姓一人を伴ひ、自分も鍬や鎌を担いで、せっせと開墾に出かけて行った。朝は暗いうちから起き、握り飯を腰にぶら下げ、古洋服に脚胖と言う行装で、暁の星がまだキラキラ瞬いて居る大空の下を、朝風に吹かれながら濶歩して出かけた。

町のどの家もまだ眠りから醒めない。所々の軒燈がほんのりと残光をちらつかせて居るばかりだ。街道の向ふをゴロゴロと荷車が折々通りかかり、畦に出ると草の露はしっとりと濡れて、足袋の裏がぢくぢくと冷めたく感じる。開墾地に着く頃には夜はだんだん明けはなれて、東の空がうす紅く色どられ、林の中からは小鳥の囀る声が、生々と朝の冷めたい空気の中を流れた。

それはちょうど冬の初めであった。麓の草むらで一吹やってから、僕と園丁とは鎌をとって、山の傾斜面を下から頂きの方に向って、上へ上へと灌木を刈り込みつつ登って行く。サクサクと音をたてる鎌の刃が工合よく運んで、見る見る開墾面が拡げられていった。

一方の百姓の方では、既に伐り開かれた部分に鍬を入れて、横延びの階段を作りながら、植付面の土壌をきずいて進んで行く。大自然の懐に、黙々として仕事を続ける僕たちの心の中には、何の考へもなければ、何の思慮も浮ばない。ただ働いて居るばかりだ。寒い冬の朝にも額に流れる汗が乾く間もない。身体中の血液は万遍なくよくまはって、全体がポカポカして来るのを覚へる。此瞬間だけの気持は、都会ではかって味はったことのない壮快味であった。

（中　略）

遠く眼を前面に注げば、渺々たる太平洋の波涛は、さながら白絹を延べたように、模糊としてかすかに御前崎の端が烟って居る。焼津の浜は淡く映じ、藤枝の町は点々として箱庭を並べたるの観があった。糸のような東海道の線を、マッチ箱に似た汽車が百足の這ふように走って、視界に入るものはことごとく大宇宙の中に、小児の玩具を見るにひとしかった。パスカルの所謂無限大と無限小とが我知らず頭に浮び、有限の微小や人為の薄弱が、ひしひしと痛感される。

無限の穹窿を背景にして、大自然の中に小さな自分が吸ひ込まれたときは、この憐むべきけちな葦ですら、あの哲人の説いた天地の心とでも

言ふような実感を、その刹那だけでも味ふことが出来た。しかし展望を終って麓に降りたときは、再び小さな我にかへり、六塵の羈絆は依然として僕を縛って居る。

鎌や鍬を持って午後の労作を一生懸命につづけてから、夕陽の没する頃に、僕たちは夕靄の中を家路にたどる。町の街道を越へて裏の小路に入る頃には、もう宵の明星が群星をひきいて輝いて居った。

疲れたからだの汗を入浴におとしてから、ランプの下で妻と共に晩餐をすませ、僕は書斎に閉ぢこもり読書や瞑想に耽るのを日課として居った。

其一室でひもとく哲人の書から、僕は飢へ渇くが如く、心の糧をむさぼりとらふとしたり、自分勝手な公案を拈提して、怪しげな坐禅をくんで見たりしたこともあった。

とある。

○　坐禅と念佛

「生命の廃墟」（二三四頁―）

其頃町に、父たちを中心とする佛教の講話会が時々催され、それには主に曹洞派の禅僧を聘して提唱を開くことになって居ったが、同宗大学林の学長Aや、伊豆の温泉地に有名なる道場の、当時首座をして居たKなぞが、ときどき来聘され、其会場に当てられた田中町の禅寺に会員の人たちが集り、懇ろに参聴した。

殊にKの熱烈火の如きその提唱は、Aの飄逸無凝のそれと相対して、頗る人々の心をひいた。Kはもと或師範の教鞭をとって居ったが、中年にして感憤するところあり、家を捨てて西有穆山を師として道に入った人であるだけに、其真率なる風格と痛絶なる禅風は、惻々として人を動かし、一句一語より迸しる峻峭透徹の言詮は、その全人格をして滿身これ公案なるかの感をさへ深く浸みこませた。

（中　略）

家には父が現役当時からの乗馬が一頭飼養してあって、労作の休みには、其背に跨って四方に散策した。町の出はずれから松原伝い旧東海道に沿ふた所に、観音山と言う崖の宮祠があったので、僕はときどき、其麓に祀られた日露役戦死者の墓畔におもむいて、そこの樹蔭に馬をつなぎ、瞑想にふけることもあった。

前に展った田園に働いて居る百姓夫婦の姿だの、空に舞ふ鳥の行方などを見まもりながら、僕はいつまでもいつまでも、寂として想ひに沈潜する。四辺はシーンと静まって、おりおり木の葉の風に鳴る音が聴えるくらいで、馬も繋がれたまま黙って草を喰って居った。

はるか向ふには、高草山が聳え、雲が其嶺にただよって居る。周囲の沈静なのにひきかえ、心霊の海はさかんに波立って、さまざまな内面的問題が限りなく湧き上った。生活とは何ぞや。死とはなんぞや。そうして今の自分とは何ぞや。社会に対する心と、己れ自身に帰るときの心。家庭や周囲との関係。現実と理想。霊と肉。本能と理智。あらゆる混乱が渦をまいて、それからそれへと、生命の背反や、心の争闘にさいなまれて行った。そうして最後は念佛に走った。

とある。

開墾と念佛。文八はそこに知行合一の道を夢みていたのである。

しかし苗木を植えつけた時、彼を待ち受けていたのは無為の生活であった。果樹からの収益は、少くとも十年をまたなければならなかった。そして農民達は、この気まぐれな文人を白眼視したのであろう。

六　長江の畔

○　辛亥革命

トルストイの農村生活を夢みた文八だったが、それは失敗だった。父が渋川玄二に紹介してくれたので、上京して朝日新聞社に入社した。本人は一面の政治記事担当を希望したが、社会部に採用された。

最初の仕事は、台湾から来た実業団を、水戸の後楽園に案内して、その記事を書かされたが、失望した。間もなく退社した。

清国では、四川鉄道国有化反対運動が起り、各地で革命軍が蜂起した。一〇月一一日、革命軍が、武昌・漢陽を占領して新軍の黎元洪を都督に推し、中華民国軍政府を組織した。一〇月二八日、黄興・宋教仁らは日本人同志北一輝らと上海より武昌に到着したが黎元洪の下風に立たざるを得なかった。

一〇月の末、政府軍が攻めよせてきた時、黄興は漢陽方面の前戦総司令官として奮戦したが敗北して武昌にのがれた。しかし武昌では敗軍を迎え込れなかったので、黄興は日本人同志に護られて上海にたどりついた。

しかし、この武漢攻防戦の間に、上海・南京・広東その他各地で革命軍が蜂起していた。一二月二日武漢では、革命軍と清軍が停戦協定を結んだ。この頃、黄興らは南京にのりこんで、そこに革命の臨時政府をおくことにしたが、武昌にいる黎元洪との調整がつかないままであった。

日本の朝野の人たちは、この革命のなりゆきを注目していた。一一

月一九日には、犬養毅と古島一雄が、一一月二七日には頭山満の一行が上海にのり込んでいる。

文八は、この頃友人の和田瑞から楊子江ゆきの相談をうけた。和田は豊川良平の一族であった。豊川は岩崎弥太郎の従弟で、明治三三年から四四年にかけて、三菱合資会社の銀行部長をしていた。亡命中の孫文に金銭的援助をしたこともあったと言う。

しかし、和田の今回の渡支は、大倉喜八郎からの依頼であった。大倉は犬養からたのまれて、革命派を援助したこともあったが、清国方面にかなり投資していたので、革命の真相を早くつかみたかったのであろう。

藤枝の農村生活にも失敗し、朝日新聞社をも退社して、浪人生活をしていた文八は、父とも相談して、父の旧部下であった支那通の野村岩蔵とつれだって、和田に同行することになった。

○ 出　発

「生命の廃墟」（一七三頁―）

資本家のWと廣島にて落ち合ふことの約束で、支那通のNと僕は、冬着の軽装に身を固め、新橋駅から夜行列車に投じた。

（中　略）

二人は廣島に到着してWと会合し、旅の準備を整へて長崎より乗船すべく、西に向って出発した。

Nと僕とが、都合により途中肥前のO驛で下車し、そこに旅団長をして居ったNの恩人にして大先輩なるH將軍を訪ふたときは、夜半の午前一時頃であった。それにも拘らず、H將軍はNの珍しき来訪に歓喜して、二人を茶の間に招じ、既に就寝中なる夫人も令嬢も起こして、酒の支度をなさしめ、盃を挙げて深夜を語り合った。

僕の父はH將軍とは旧知の間柄であって、昔は或問題について精神的の運動を共にしたこともある因縁から、懐旧談がはじまり、殊に將軍の愛する同郷の後輩Nと僕とが提携して、Nと縁深き支那の空に向ふと言ふのを、大に快として悦ばれた。

戦術の大家にして、しかも陸軍部内に珍らしい思想家であり、かつ社会のあらゆる事情に頗る精通して、円熟なる思慮を蔵する將軍は、いろいろと有益なる注意を与へ、さらに紀念とし、その写真をさへ贈られた。

（中　略）

とある。

大村駅で下車、旅団長堀内文次郎少將に会って、渡支に先だって、色々注意を受けた話である。野村があらかじめ手紙を出していたのであろう。堀内は長野県出身、明治一八年陸士卒の秀才で、昔月曜会事件で小島好問らと共に山縣有朋ににらまれた将校の一人であった。日露戦争後、駐在武官となって諜報関係にもかかわり、野村はその時部下として活躍したのであろう。堀内は明治四四年九月六日少将に昇進、旅団長となって大村に赴任していたのである。

（つづき）

やがて二人は長崎のF旅館で、そこで待つWと一しょになった。

長崎の港を出帆したカナダ太平洋汽船会社のエンプレス・オブ・チャイナ号の甲板には四人の日本人船客が逍遙して居った。三人は僕たち一行で、一人は当時満州第一の大会社Mの有力者なるS中佐であった。四人は食卓を共にして、航海中よく快談放語した。殊にS中佐は、僕がかって満州にて、其親切なる便宜を受けたこともある知人で、しかも其向ふところが同じく楊子江の畔であったのは、殊に奇遇であった。

此大汽船の中には、米国より帰朝しつつある支那革命黨の人たちが若干乗り込んで居って、何か、その物資らしいものも積み込んであったようだ。（中略）

とある。

満鉄からもS中佐が調査にのりだし、米国からは革命黨の連中が、武器らしい物資を積み込んで乗りこんでいたのである。

○ 上海

「生命の廃墟」（一八五頁―）

丁度船が呉淞沖に入ってきたとき、遠き方角から空と水とに響きわたるような砲声が一発轟然と人々の耳朶をつんざいた。なんとなく臨戦地帯にでも臨んだような壮快な気分が漲り、僕たちは双眼鏡ではるかその空を眺めたが、それはなにかの号令であったらしい。やがて船は其沖にかかったまま錨を下ろした。

そこへ一艘の艀が現はれて船艙から沢山の荷物が運び出され、それから間もなく、汽船会社のランチが到着したので、一同は、それに乗り移つり上海の峰頭に向って朝風の中に浪をけった。（つづく）

とある。

アメリカ方面からの密輸の貨物がおろされたのである。当時上海は革命軍の手中にあった。（つづき）

ヴイクトリヤガーデンに近き桟橋に、ランチが繋船されてから、税関吏の調べがすみ、僕たちは上陸して馬車を駆り、Hホテルに急がしたのである。

そのホテルの一室で、萬事要件の手順が相談されてから、僕は先発として汽車に投じ、当時支那革命黨の中心なる南京に向って上海の朝を離れた。（つづく）

○ 南京へ

（つづき）一等車の中には、三人の外国人と一人の異様な服装をした支那婦人とが乗り合はして居る。彼女は革命黨將校に似た男装をして、金モールの附いた軍帽を載き、腰には帯剣さへして居るので、なんだか水滸伝の中からぬけ出して来た女將軍を眼の前に見るような好奇心に駆られ、僕は道々仔細に、その観察をほしいままにした。

支那の女性には極端な二方面がある。大分は躑躅足して室内にのみ閉じこもる、所謂ありきたりの支那婦人であるが、他には猛烈破天荒な小説的女丈夫が、往々にして飛び出す。

軍装に似合はぬ豊満な柔かき肉附きの色白き皮膚と、その眼瞼にはい

つも紅潮を呈して居る、その様子の濃艶さ、しかもその帽の下に、はみ出す黒髪のほつれを、朝風になぶらせながら、車窓に片肘ついて、外を眺むる彼女の姿を見たときは、僕の心に戯曲的場面の想像をさへそそった。

三人の外国人は、だんだん話の模様によれば、これから南京の革命黨仮政府を訪れんとする米国の新聞記者たちで、彼等はヤンキー一流の快活さを以ってよく語り、よく笑って、談論に花を咲かせて居る。やがて旅行瓶ウィスキーがとり出され、互に小さき盃を廻はして、愉快気に物語って居ったが、彼等の視線の流れも、絶へず、この珍しき服装の支那婦人の方へ、そそがれずには居られなかった。

窓の外には、寒風凜烈として吹きすさび、目も遙かなる大陸の平原は、見渡すかぎり茫々として萬目蕭條たる冬枯の光景を呈して居る。車内には、折々ボーイが熱湯に浸たしたタオルを乗客に配り、人々はそれで顔や手なぞを拭い、塵多き室内の気分を一掃した。

列車が上海を離れて余程たってから、元気な若い米国記者は席を立って、窓の辺りに寄り、そこに腰掛けていた支那婦人に、何か一言二言話しかけたと思ふうち、だんだんと彼等は心安くなり、南京近くなる頃には、婦人も米国記者の群に加はって、その小さな盃を受けたりした。微醺を帯びたその豊頬には、一層の紅を増し、彼女は快活によく語って居た。

聴くところによれば、婦人は南京の仮政府に到り、そこで要件をすましして後、当時出征準備中であった革命黨一方の旗頭たるRの北伐軍に従事し、其衛生隊にでも加はるような口吻にうけとられた。そうした途上の人とは想はれないような嬌艶な姿態は、どことなく彼女の男装的軍装に異様の趣きをつけ加へて、僕をしてますます其周囲に眼を見張らしめた。

嚴冬、大陸の平原を走る汽車、其室内に語り合ふ三人の軽装したる外国人と一人の男装的支那人、それを熟視しつつある一人の日本人旅客。なんだか其一齣は、支那小説の篇中にでも描かれた画面のようにも想はれて、一層の興味を覚へた。（つづく）

とある。

文中のRとは、後にも出てくる武昌の黎元洪を指しているのであろう。だとするとこの婦人は、まだ黎元洪が北伐軍の陣頭に立ってくれるものと信じているようである。

○ 南京城

（つづき）

列車が南京に着いたとき、三等室より降りた、婦人の従者らしき一人の支那人は、しきりに彼女の荷物なぞを世話して居った。一同がプラットフォームに出るや、飄々と唸る朔風は、粉のような雪の片々を交じへて、人々の顔に吹きつづけた。

僕は厚き外套の襟に頸をうずめ、長靴を踏みしめて停車場の外に出で、馬車を求めたが、なかなか見当らない。その内漸く一台見出したので、急ぎ呼びとめ、そのむさくるしき車内に腰をおろした。破れた綿入れの

ような毛皮に身を包んだ老人の御者は、一鞭を加えて、降りしきる雪の中を走らし、寂しき田舎道を南京城内に向って馬を駆った。

雪は粉々として馬の背を白くし、鞭の音はのべつに御者の手に響く。ガタガタと身を躍らすばかりに揺れながら、馬車はまっしぐらに寒い風の中をつき進み、眼に映ずるかぎり荒涼たる光景が続いて、やがて南京城門に達した。

いかにも支那の古代を想はせるような、大きな城門をくぐると、だんだん南京の町が近づき、道の両側に並んだ商店の軒先には、漢詩にでもありそうな誇大な形容的字句が記されて、金文字に浮き出す屋号が、殊更に人の眼を惹く。雪道の上を支那兵が銃を肩にして往来する。苦力の群れがそこここに徘徊して店頭なぞをのぞいて居る。町はなんとなくざわざわとして、人々の歩く様子にもどこか調子が変って居るので、革命的気分とでも言うような空気が、四辺にただようて居るのを感じた。

馬車は一軒の大きな支那家屋に着いたが、それは日本人が、新しく始めたPホテルである。僕はそこで降りた。入口に近い土間にすへ付けられたストーブの廻はりには、四五人の日本人が暖をとりながら、しきりに話し込んで居った。靴のまま女中の案内につれ、二階の一間に通されてから、ほっと一息して室内を見廻すと、そこには板敷の上に薄べりが敷きつめられ、板壁で隣りの部屋と仕切ってある趣きは、野営の廠舎にでも入れられたような工合だ。程なく火鉢が運ばれ、茶器が備へられて、綿の厚い丹ぜんと着かへたときは、それでも宿屋についたと言う気持に落ちついた。

遠くで支那兵の吹く喇叭の音が、陰気に夕空の中を伝はり、戸外には霏々として白雪が降りしきった。僕はざっと入浴をすましてから、この粗野な旅館の一室に仰臥し、翌日からの用件を胸に画した。

（翌日）停車場に出迎へた僕と共に、WとNがホテルに到着し、つくとすぐNは、そこに滞在中なる旧知の某日本将校を訪問した。Nが室に戻ってから三人は、静かなる一間に膝を交へていろいろと今後の談合を重ねたが、寝に就く前、僕もNに紹介されて、前将校の部屋を再び訪れ、其夜はをそくまで、さまざまな談笑の中に時を過ごした。（つづく）

とある。

当時ドイツは清国官憲を助けて革命軍を圧迫しようとしたが、日本は革命軍に同情的立場をとっていた。そんなわけで、上海を出発する時、文八は、ある程度南京方面の情報をつかんでいたようである。

○ 黄興副総統

（つづき）

翌朝は、Bと言う所に、その事務所らしき家を借りて居る、他の日本将校の許に赴き、會見をすましてから、附近の古跡を見物に出かけたWと分れ、Nと僕は、町の一廓に屯して居る仮政府の陸軍部に足を運んだ。当時の革命軍将校たちに旧知の多きNの名刺を出して、時の副総統にして且元帥なるKに面會を求めた。

案内されて二階の応接室に入ると、間もなく髪を奇麗に分けて軍服に身をまとふた、体躯堂々たる偉丈夫が現れて、Nと挨拶をとりかわした

が、それが当時名声嘖々たる革命黨の領袖たるKであった。Nの紹介がすんでから三人は、其一室に語り合ひ、さらにKの次長たるSや、他の將校たちにも面談した後、やがて時刻も移ったので、他日の会見を約してホテルに帰った。

Kの悠揚たる態度、其莞爾して絶へず微笑を片頬に湛へ、静かに落ちついて物語る温き様子は、実に当時衆望を一身に集めた英雄の貫目が、充分に溢れて居った。

南京滞在中には、しばしば革命黨將校たちの訪問を受けた。しかし僕たちの用件は政治的意味のものでなく、或種の実業的調査に過ぎなかったのである。（つづく）

とある。

実業家の代表者としてきた和田と、中国革命の同情者で、この後も大陸浪人となって活躍した野村岩藏とが、文八を中心に結合した視察団だったのである。

○ 漢口へ

（つづき）

○やがて此地の歴遊もすんだので、或日の朝其町を出発し、楊子江に沿ふ下関と言ふ所から、日清汽船に投じ、洋々たる東洋第一の長江を溯って、漢口に向けさらに旅を続けた。この時も偶然にS中佐と乗り合はし、珍しき航海の途中を愉快なる甲板の逍遙に費やし、その穏やかにして畳の上を行くような軽い心持で、四辺の光景を眺めつつ流れをのぼった。

岸近く進んで行く船の上からは、廣く茫々として両岸に展開する大陸の平蕪地が、一望の下に視界に横はって、冬枯の野は、どこからどこまで眼の届くかぎり、蕭條たる寂莫の光景を呈し、遠く地平線は大空の雲と連って、漠々として限りが無い。岸に沿ふて所々に點々する楊柳は、その枯枝を寒空にさらし、支那風の画面によく見るような趣きを添へ、時節はちがって居ても、あの

白瀬風細　秋江ノ夕。　孤岸船帰　一帯ノ烟。

と歌はれた従容録の一句さへ、そぞろに心に浮んだ。

漢口に近づくに従って、だんだん租界の壯麗な洋風の建物が現れ、武昌や漢陽の方には畑が見え、いつしか光景が全く一変した。

船が到着したので、一行は車を走らせ、M旅館にひとまず落ちつくことになった。其家には沢山の旅客が蝟集し、中には、南京で知り合った連中の一人二人にもめぐりあった。部屋に行季をおろしてから、Nと僕とは、当時の日本駐屯軍に、或將校を訪ひ、夜に入って三人は町を見物した。

楊子江沿岸の物資を集散するこの大市場は、町が革命戦のあとであるにもかかわらず、よく整頓して、繁華は上海にも譲らないような賑はしさであった。しかし河岸に近い支那町は到る所砲火のために破壊され、その崩れた壁や散乱する家の破片が、煙にくすぶって、そこここに凄惨な戦のあとをとどめて居った。

河の畔にたたづんで遙かに眺むれば、前面には廣き流れを隔てて、武昌の町が暮靄に包まれ、彼方には革命軍が砲陣を敷いたと言う漢陽の丘

が高く聳へたち、また流れを擁して河流の一角に、あの大古、禹王が水を治めたと口碑に残る丘陵の姿が、萬古の面影をたたえて居った。

（つづく）

○ 武昌の黎元洪

（つづき）

翌日領事館に赴いて、武昌に渡行する旅の護照を乞ふが、下附がむつかしかったので、Wは一人旅館に居残り、Nと僕とだけが河を越へて、戒厳地区なる臨時大総統の根據地へ乗り込むことになった。

対岸に上陸すると革命軍の歩哨線が張られ、点検が頗るきびしい。其処を無事に通過して、二艇の籠をやとひ、二人は席を構へて、目もたかく苦力の肩に擔ぎ上げられた。支那の大官でも通るように、僕たちはわざと悠揚たる姿勢を整へ、腰掛の上にそり反って、右手に巻煙草をくゆらしながら、人馬の雑踏する武昌の城門に向った。

其頃はちょうど北伐軍が出征準備中なので、町には彼所此所、多くの支那兵が革命軍の記章をつけて、所々に屯したり、徘徊したりして居る。僕たちの籠が通ると、中には山出らしい兵卒が、軍衙の役人とまちがへ、慌てて挙手の敬礼するものさへあった。到る所、附近の地方から、戦後の買物に寄りきた群集は、あの狭い石畳の敷きつめられた往来の中を、肩と肩とすれちがうように押し合って通った。

籠は小高い所に位置して居る総統府の城門にいつしか達した。そこに銃を立てて警戒して居った一人の歩哨に、僕たちは刺を通じ、R総統に面會を求めた。

やがて二人は哨兵に案内され、門内に入り、建物の廊下を伝って応接室に腰をおろし待って居ると、三十分ほど経て、廊下を通るカツカツたる靴音につれて、鏘々たる佩剣の鳴るのが近づいてきたかと想ふうち、静かに扉が開かれて、いかめしき大元帥の軍装に身を固め、剣を右手に提げた、温顔の老將軍を先にし、副官職章や参謀肩章を肩や胸にかけた四五人の青年將校が入ってきて、ずらりと列んで席に就いた。彼らは革命軍勃発の旗あげに、驍名を天下に轟かしたR総統と其幕僚であった。

その昔、武昌の武備学堂教習の頃から、Nは此將軍を熟知して居ったが、此時は、特に懐中にもたらした某有力者の展書を差出して、除に一行の来意を告げた。

よく肥へた赤顔の愛敬に富む落ちついた態度のRを前にして、会談を遂げてから、再び城門を離れた僕たちは、其日の夕方もとの流れを渡って漢口に帰った。（つづく）

南京に較べて、武昌は異常な緊張状態にあった。黎元洪をとりまく青年將校たちは、最初に革命に成功した軍隊として自負心にみちていたのである。しかし彼らの内外には、さまざまな主義主張が渦まいていたのである。

一二月一七日、日英両国は、中国南北の和平に関して、官革両派に申入れをしている。では野村がさしだした某有力者の手紙の内容は何だったのだろうか。これは南京駐留の日本軍將校からの手紙ではなか

ただろうか。「よく肥へた赭顔の愛敬に富む落ちついた態度のRを前にして、会談をとげた。」とあるが、その時、何が語られたのであろうか。

黎元洪（一八六六―一九二八）は、湖北の人。天津水師学堂出身、日清戦争の時は、定遠の砲術長であった。のち陸軍に転じ、湖北新軍を訓練し、辛亥革命の時は、武昌第二一混成協統であったが、革命軍にかつぎあげられて、湖北革命軍の大都督になっていた。その時数えの四六才であった。討伐軍の湖広総督袁世凱はすでにこの時和平の密使を送っていた。

後袁世凱と孫文を結ぶ仲介的勢力となり、一九一六年には大総統にもなった人物であった。

○ 終章

（つづき）

M旅館に滞在して所要を遂げたり、NC汽船のNや、MB会社のMなぞと談笑したりして、数日間を過ごした僕は、やがて或要件を帯び、同行の二人と別れ、楊子江の流れを下って、またもや南京城内に向った。

もとのPホテルに数日間を費やし、若干の人々と會見をすましてから、鉄路に依って上海に戻ったのである。

そこへ後からWが、N一人を漢口に残して此地に帰着したので、共に上海の幾日かを送り、さらに定期船の出帆を、Wより一足先きに待つこととなった。（終）

とある。

文八が単身南京に立ちよった要件とは何だったのだろうか。漢口できいた袁世凱や黎元洪の情報ではなかっただろうか。この頃南京には、十七省の革命黨の代表者が集まって、誰を大総統に選出するかを相談していた頃である。

野村岩藏が一人漢口に居残るようになったのは、何故だろうか。明治四五年一月一日、日本軍五百人が、漢口警備の陸戦隊と交代するため、漢口に到着している。

和田瑞は何故上海に居残ったのか。一九一二年一月一日、南京では、孫文が臨時大総統に就任した。しかしその時の国務院の顔ぶれは、革命派三名、立憲派二名、旧官僚二名であった。袁世凱がねがえるかも知れないと考えて、孫文は臨時大総統職についたのである。政局はゆれ動いていたので和田は上海に居残ることにした。

では文八は、何故単身帰国を決意したのであろうか。この有名な歴史的権謀と陰謀のかけひきの場をまざまざと見せつけられたからであろうか。ふと人間の業の深さに気づいたためだろうか。

七　マレーのゴム園

○　三五公司

文八は辛亥革命に、かすかな夢をいだいて出発したらしいが、権力争いと、それにからむ列強の利害関係の根深さを見て逃げ帰ったのである。さりとて日本国内にも、彼の心をひきつけるものは見当らなかった。

そんな時、池田旭にすすめられて、三五公司に入社することになった。明治四五年であった。池田は、学習院卒業後、アナポリス兵学校を卒業した旧軍人であった、三五公司は、明治三五年に設立された三菱系の会社で、本社はアモイにあった。社長阿久澤直哉。

この会社は、早くから南方方面で活躍していたが、この頃、マレー半島ジョホール王国バトパパの奥地に、ゴムの植林を始めていた。文八は、この南洋未開の土地に、新天地を求めて出発することになったのである。

各種工業の発展につれて、世界のゴムの需用は年々増加しつつあった。当時は、ジャハ、スマトラ・ボルネオ・セイロンその他でも植林されつつあったが、マレー半島の植林は、それらの総計に匹敵するほどであった。

日本の会社も、日露戦争後、このマレー半島のゴム栽培に参加するようになり、中でも三五公司の植林は、その最大のものであった。

マレー半島は、一四〇〇年頃、マレー人による王国が成立していたが、一五一一年にはポルトガル人に占領された。その後一六四一年以後はオランダの植民地となり、一八一九年以後はイギリスの植民地になっていた。

○　門出の旅

「生命の廃墟」（四四頁―）

台湾から南支那を経由して、シンガポールに到着した僕等夫妻の一行は、幾日か此熱帯の港町に滞在して後、或日の夕方、ジョンストンピヤーの埠頭近くから、ジョホールのバトパパ港に通ふ小さな汽船に身を投じた。其船の乗組員は、会計の支那人をのぞく外、船長始め皆馬来（マレー）人であった。

船長室の前なるささやかな甲板の空所に据（す）へられた籐椅子（いす）に一行は陣取り、此原始的気分に満ちる小蒸汽船の上から、内地の瀬戸内のような島の間を縫（ぬ）ふて、次第に現はれ来る沖の方を眺めた。

僕たちは、何となく寂しい漂泊者のような心持に浸った。遙か向ふには、スマトラの島影が、漂渺としてマラッカ海峡のあなたにかすんで見へる。スクリュウにからまる波の音に和して、耳をかすめる水夫の歌が、異境の情緒をそそって、しみ入るように哀調をもたらした。

やがて赤陽は薔薇色の空を包んで、深碧なる海の上に、黄金の波を散らし、淡い星影は船の動揺につれて、絶えず水平線のあなたに移ってゆくように見えた。

此無限の光景に浴して、僕等が黙想して居る折柄（おりから）、下甲板の前方の空所に、船長を中心として一同の船員が集まり、今や其壮厳なる姿を、浪

間に没せんとする落日の大観を前にして、静粛なイスラムの祈祷が始まった。其沈めるようなかすかな祈のり声は、ゆるやかに夕暮の空気を透ふして、崇高なリズムを漂はしてくる。僕等は馬来人の信仰の、如何ばかり醇真のものであるかを、しみじみと感じた。

大自然の中に、神意を感得することの出来る彼等の生活は、随所に上帝の御姿を捉へる、大宇宙は実に彼等の殿堂であった。

単純な心の所有者である彼等こそ、真に文明人にもまして幸福なる生涯を送るものではあるまいか。虚偽と争闘とに充つる僕等の生活は、今、眼の前なる未開化人の、あるがままなる姿を認めて、大に学ぶところがなくてはならない。（略）

とある。

自然法爾の世界を求めて、淋しく流れてきた文八は、今はじめて原始に近い信仰にふれて、深い感動にうたれたのである。

○　現地の光景

「生命の廃墟」（五二頁―）

正午頃、大きな建物の隠顕する鬱蒼たるゴム林の、出口に当る河岸の桟橋に、ランチは纜を結んだ。そこには永久に忘れがたき友の一人なるOが、浴衣がけでにこにこしながら、元氣よく、僕等の一行を出迎へてくれた。沢山の苦力の群が、鍬をかついで向ふの道を通るのが見え、白い詰襟の服に巻脚胖をつけ、ヘルメットと帽を載いた植林地の監督者が、話しながら僕たちの方へ向って来る。（つづく）

とある。

「永久に忘れがたき友の一人なるO」とは奥村壽である。中学で二級上の先輩で、士官学校卒業後、在任中落馬のため脚部に故障をきたし退職した、予備の騎兵大尉であった。文八より一年前に三五公司に入社し、同じジョホール王国内にあった、他の植林地の管理人であった。以後二人は、兄弟同様のつきあいをつづけていたが、不幸大正七年シンガポールで病没した。天真爛漫とでも言うべき豪傑であったと言う。奥村の死は、「生命の廃墟」の他の部分にくわしく書かれている。

（つづき）

熱帯の日光の直射は、ギラギラと遠くの道の上に、かげらうをたてている。傍の苦力小屋の前に流れる溝の中には、五六羽の家鴨が面白そうに泳いで居った。それは日本人経営中、南洋第一のゴム会社の事業地なるS植林地の入口であった。

洋館に馬来式を折衷した大きな建物、入口の小高い階段を上ると、廣いヴェランダが展がり、そこの欄間には、油絵の風景画や、植林地の写真が掲げられ、隅の方にガラス戸の食品棚が置かれて、洋酒の瓶が揃っている。板張りの壁の前には一台のピアノ、中央には大きな長方形のテーブル、そのそばには丸い大理石のテーブル二つ、廻はりには椅子が並べられて、幾つかの植木鉢や盆栽が所々に置かれてある。風通ふしのよさそうな欄の辺には、籐のソファーが散在してあった。

其倶楽部の一室に、社宅がきまるまで、同行者のFと僕たち夫婦は、一時仮寓することになった。

（中　略）

幽寂なる熱帯の夜の静けさ。四辺の林の中からは虫の声が、さながら小雨を降らすように、自然の沈黙に一層の寂びを加へ、遠くの苦力小屋でジャワ人の歌ふ声が、高くゆるく夜の沈まった空気を通わして耳に伝はる。道一つ隔てた向ふの社宅から、ぼんやりとランプの光が往来にさし、そのうす暗き影の下を、警戒の印度巡査が、銃を肩にぶらぶら徘徊して居る。澄み渡った高き大空には、星が梨子地を散らせる如く、きらきらと碧玉の光を漂はして居った。

（中　略）

見よ、茫々たる数哩にわたる開墾地の朝の光景を。

遠く地平線のあなたは、鬱然とした大森林の梢が黒き一抹の線をかくして見え、彼処には伐り倒された森林のあとがある。その焼き拂はれた樹や株の上に、斧を揮ふ支那苦力の一団。此処には植へ付けられて間もないゴム林の中に、鍬を入れて草を除きつつある馬来苦力の一群。道のそばの苗木には、孜々として一種のあぜかきに餘念なき夫婦者の労働者が、まぶしい朝の光を正面に受けて、うづくまって働いて居る。向ふには一列に散在して鋤を揮ふジャワ苦力の手で、低い地面の方に、ドシドシ大きな溝が堀られて行く。

折々ホーホーと鳴く猿の鋭い甲高な叫びが、防風林の中から、朝の静かな空気を破って耳をかすめ、日はだんだん高くなって、赤道直下の強い日光の直射は、作業場の土の色をむしかへすように輝りつく。それでも、ときどき吹いてくる軟風のそよぎは、汗ばんだ額に心持よく感じられた。

とある。これがはじめて見た、大自然を背景にした労働の姿であった。

○　マレーの三浦環

「生命の廃墟」（六〇頁）

倶楽部に滞在してから一ケ月程たって、僕はパラチブスにおそはれて、その身を異境の病床に横へた。そうしたことから、シンガポールの本部に在勤中なる会社専属のM医学士が迎へられた。M学士、それは甘きローマンスの主人公で、世間に知れ渡った恋の勝利者。そうして日本で有数の声楽家として嬌名を轟かして居った夫人T子の夫である。

あの華やかな色彩に富んだ生活を表面に持つ、孔雀のような夫人と彼とのエピソードは、かなり多くの戯曲的場面に操られて、彼等は、あらゆる世間の批判と周囲の迫害とから逃がれて、遠く南洋の地に、その濃厚な情思を運び来ったのである。

夫人の裏面には、Cと呼ぶ熱烈な思慕を捧ぐる憧憬者がつきまとった。このCは夫人のドイツ語の師で、様々な人生の波瀾を漕って来た天才肌のほとばしる男で、彼は朝に晩に、かの女なくしてはたえられないような恋の情火に燃え、M学士のあることを知りつつも、執拗にT夫人の後を慕って居った。

かかる追跡の想ひ出におびえつつも、二人の情人は遙かなる南の空に、放たれた恋の自由を味ふべく、その生涯の一時を此会社に托して居った当時のことであった。　（つづく）

とある。

三浦環は、明治一七（一八八四）年東京に生まれ、昭和二一（一九四六）年六三才で死んだ歌手である。父は柴田猛甫。はじめ軍医藤井善一と結婚したが、藤井が東京を離れている時も、さまざまの噂さにつつまれていたが、後離婚した。その後遠縁にあたる医学士、三浦政太郎と結婚した。三浦は二人のドイツ留学費を得るために、しばらく三五公司のシンガポール病院に勤務した。その留守中、環はドイツ語の家庭教師千葉秀甫と関係が出来たが、環はおそろしくなってシンガポールに逃げてきたのである。

（つづき）

髪の毛を綺麗に分けた、痩さ形のすらりとした風で、やや寂びしそうな顔の表情を持ったMと、濃い黒髪をふっくらと結び、その前髪にはいつもゴールデンピンをとめ、薔薇色の豊頬に、ほほえむたびにえくぼを湛へる、太り肉の艶な夫人とが、倶楽部の花形として、食卓を賑はしている姿を、僕は病床の中からいつも想ひやっては、其話声に耳をそばだたした。

時をり聞ゆる蓄音機の歌節、うち興ずる一同のさざめき、楽しそうなヴェランダの団欒には、どんなにか病める僕の心がひきつけられたらう。

晩餐後、二人の情人は互に寄り添ひつつ、静かな夕暮の林間を逍遙すると見えて、夫人のふるえるような独唱が、高く低く次第次第に浪うって、林を輝らす水のような月光の流れに、そのリズムを漂はし、餘韻は嫋々として、深い夜の空気の中に吸ひ込まれて行くように聞えることもあった。そうした詩趣に満ちた二人の想出多き生活は、日毎にくり返えされたのである。

やがて僕の病気は、Mの丹精によって床上げの出来るまでに快くなった。それから僕もヴェランダの団欒に交じっては、よくMや夫人としばしば戯言なぞ言い合ってはしゃいだ。殊に夫人の噂は、幾度か内地で、その人を識って居る友人の口から、その恋物語を聞かされて居ったので、今彼女を眼の前に見て、何となく纏綿とした生きた情史をひもとくように感じられた。

その優しい弱い性格の発露は、僕の今までの想像とはちがって、純日本式婦人の型をM夫人のうちに認めさした。いかにも妖婦のように語り伝ハている世間の批判をうらぎって、僕の夫人に対する同情は、進んでMの社会的に気の毒な心胸にまでも、深く察しやらずにはいられなかった。

Mは僕の全快を確かめて、病後の摂養に関する注意を、いろいろと細かに妻に言い残して、或日の朝、夫人と共にS植林地をひとまづ去ることとはなった。（中略）

とあって、ついで、その三週間後に、環が一人泣きながら帰ってきた話がある。

此珍しき出来事の裏面にひそむ原因は、其翌日T子の口から恥かしそうに語られたが、それは今度日本から、彼女と深い因縁のもとに絡みつかれている恋の追縦者たるCが、病躯を提げて渡欧する途次、この南洋に立寄って彼女を脅迫するかも知れぬと言う情報にもとづいて居った。

「ひょっとすると、妾、殺されるかも知れませんの。あの狂人のような熱情のCのことですから」。そう言った夫人は、いかにもそのことが迫ってきたかのような恐怖にうたれた表情を示して、悲しそうに物語った。それからCとの間に起った其時分の出来事やら、彼の執拗な激しい恋の追跡の想出やら、隠すところなく、其唇から洩らされた。

かかる心の悩みに堪えかねて、最愛の夫一人をシンガポールに残こし、あの寂びしいマラッカ海峡の夜の旅を、土人や支那人ばかりの荒くれ男の群に交って、かよわき女の身の、思ひきって断行したのである。

そうして夕暮、鰐の住むB河をさかのぼり、昨夕S植林地に到着した時は、混乱した意識のもつれに、こみあげた哀愁の胸をかき乱され、どうしても挨拶さへ出来かねたのである。

稀有な天才をいただいた芸術家の、途上に横たはるいばらの試練としては、彼女の恋の歴史が、多くの心の重荷を負はせたことは、決して悔むべきことではなかっただらうが、当時の彼女にとっては、それはたえがたき苦悩の一つであっただらう。たとへ、周囲の人々には、興味ある情話の波瀾くらいにしか想っていなかったにしても。

「奥さん御安心なさい。Cの来られないように、よく出張所の者にも注意して置きますから。」そう言ってSは親切に夫人を慰めた。

欧州航路で寄港したCは、シンガポールの事務所までは訪ねてきたそうだが、遂に此所までは気付かなかった。そこで事件は夫人の杞憂にとどまったものの、Cとしては随分激情の暴挙にも出かねないような性格であるそうな。彼は渡欧して、其後ウインナの客舎に病んで斃れた、と言う情報を耳にした。

彼の行動は、M夫人に対していかにあったとしても、その熱烈なる愛慕を、最後の旅の一刹那にまで運んで行った彼の衷情は、幾多人生の経験に触れて来た中年者の、やる瀬なき心の悶へとして、夫人を離れて観たる彼には同情すべきものがある。

やがてMも再び植林地に来た。二人の密のような生活は、それから大分と続いた。僕はよく夫人の手にこしらえられた得意のトマト飯の御馳走になったりした。Mが時々シンガポールに出張するときは、僕の妻は、しばしば彼女と寝台を共にしたことさへあった。植林地に住まい四五ケ月が過ぎて、M夫婦はまたもシンガポールの方に転じ、やがて任期がみちて会社を辞し、夫人と共に、此想出多き赤道直下の生活を後にし、幾多恋の波瀾多き紀念に染められている故国の空に向ったのである。

とある。

ここで注目すべきは、親鸞教徒であった文八は、愛慾を人間の業として受けとめているのである。そして環の稀有な天才を、数々の情事によって深められたものとして受けとめている。さらに熱烈なる恋を、最後の旅の一刹那まで、追いつづけたCに対して、深い同情を示したのである。

○ マレーの宗教

「生命の廃墟」（七二頁―）

ハリミングー　それは、毎週金曜日で、その日は馬来人の宗教日であ

る。

暁の空気を破って礼拝堂の祈りが、パーンパーンと村から村へと響く。回教徒の苦力や村の老若男女は、それぞれに盛装して、ゾロゾロと教主の祀られてある其祭壇へと参詣に群がる。植林地の中にも、其朝は市場が開かれて、沢山の野菜や果物や魚類が道の両側に連ったそれぞれの店に列べられる。飲食物を賣る土人の家台、布や装飾物をひさぐ印度人の筵、そう言ったぐあいに賑やかな朝の光景が展開されて、子供たちも喜び戯れ、のどかな気分は四辺に漂って居る。

常傭の苦力たちも、午後からは、それらの群に加はって、半日の安息日を、思い思いの慰楽に過ごすのである。

やがて夜になる。熱帯の静かな夜に、遠方の村からコーンコーンと踊りの鐘の音が啼やみにまぎれて伝はってくる。村にはチラチラと燈火がつく。流れで沐浴をすました馬来の若者たちは威勢よく村の方へと出掛けて行く。

そこには或土人の大きな家の前の空地で、一団の人影がさし、やがて溶けるような月の光が雲間を洩れて往来を輝らすと、單純なそれでもなんとなく花やかな、一場の踊り舞台が眼の前に映ずる。

三人の化粧した踊子の少女が、三人の気取った若者を相手にして、足で拍子をとりつつ輪を画いて踊って居る。其横には三人の楽手、囃し手。一人は太鼓をたたき、一人は鐘を鳴らし、一人はヴァイオリンを弾く。

踊子の少女たちは、甘い甲高な歌を交へて、艶っぽい身振をしながら、対手の若者と共に踊り狂ふ。

それは馬来人の村に、時々多大の慰楽として催されるトルジョゲと稱する民衆的舞踊の一つである。平素、仲間同志の間に行はれる普通の踊りにもまして、ジョゲは彼等にとって唯一の奢りに外ならない。

踊子の少女や囃し手の一組は、村の人たちの手に集められた若干の纏頭を彼等に与えることによって、他の特別なるそれ等の群から、わざわざ招かれる。植林地の日本人の若者たちも、よく出かけて行っては、彼等と共に踊ることさへあった。またたまには、植林地の中にも、苦力たちの慰楽として催すことも珍しくない。

天には星斗爛々たる穹窿が、一大天蓋を擴げ、地には森や流れや小屋や、さまざまの陰影が、あちらこちらに散らばり、巨人の這うような椰子の幹、漣のようにそよぐゴムの葉、それら大自然の背景が、この單純なる民族の享楽の一夜に、どんなにか印象を添へることだらう。粗朴な楽手の囃しにつれて波うつ原始的楽のメロディー。我を忘れて踊りに夢中なる舞台の人々。それを取り巻きワァワァとどよめく一団の黒き人影。この寂びしき馬来半島の一角にある土人村の楽しき月夜のシーンこそ、あの電光眩ゆき大都會の演舞場に集ふ人々の歓楽にもまして、真に解放された、真に自由な、真に率直な、人間性の流露せる、偽らざるよろこびの生を象徴せるものではあるまいか。

南方の月よ、星よ。いつまでも彼等の生活の上に、虚飾なる文明の黒き影を印することなかれ。僕はそう想はずにはいられなかった。

ほとんどすべての馬来人は、回教の教徒である。彼らは揺籃より墳墓に到るまで、上帝の大慈悲の前に、心からの巡礼者たることを忘れない。

大自然は神の殿堂である。太陽も、星も、流れも、その神厳なる光の顕現に外ならない。神は到る所に在ます。

礼拝は随所に行はれる。あの溝堀苦力のジャワ人が、夕暮汗にしめった鍬を、溝の傍に横たへ、大地の上に膝まづき、その労作につかれた身をひれふして、落日の大観の前に祈願をこらす敬虔の態度は、さながらミレーの描いたエンジェラスの画幅をさへ偲ばせる。

単純なる信仰をいただける彼らは、一切労作の賜物を、すべて神の前に捧げて悔まない。永い永い間の汗と血によって開かれた、ゴム林や椰子林が、ある適当なる時機において、若干の黄金に代えられ、その尊き労作からの獲ものは、彼らが唯一の歓びとする亜剌比亜メッカの祖廟巡礼の費用に当てられるのである。

（中　略）

物質の文明と、功利の世界に、囚徒の如く縛せられて居る僕たち現代の人々は、あらゆる人為の法則と虚偽の生活とから、真に解放された愛の天地に逍遙することの歓びを、ただ心の王国にのみ味ふことのかなうと言う例証を、この無自覚なる南洋の土民の生活から、汲みとることが出来るように思はれた。

無論、彼等の現実の生活には、僕等が見た理想的憧憬とは背反した、虚偽と争闘との悲しき人類の運命を擔うことが、よし行はるるとしても、彼等の信仰の生活にのみは、どうしてもこの感じを見逃すことが出来ないではないか。（略）

とある。

文八は、自然法爾の世界を目の前にして、こうした南方の人々を、心から愛せずにはおられなかったのである。そして二十年前に、シャトブリアンのルネを読んで、感動した日々のことを思い出している。

○植林地

「生命の廃墟」（一〇五頁―）

植林地の作業工程は日毎に進捗して行った。ゴムは月々に太る。若芽は次第に青葉となり、枝は追々に擴がる。畑の中の株や横木もだんだんと取片けられ、如何にもゴム園らしい面影が現はれて来る。

作業地は低地が多かったため、大風の吹いた後には、随分倒れ木も出来る。そこで一人の日本人夫と、五六人の支那苦力とが隅から隅まで畑を廻はって、毎日それ等の倒木を起こしては、支柱を立てて歩るいた。

激しい雑草の発生は、他の高地にあるゴム林なぞと違って、猛烈な勢ではびこって行く。馬来や支那の苦力たちは、終日その除草戦闘に忙しい。少し雨が續くとすぐ草軍は逆襲して、ややともすると戦闘員は退却しそうになる。そうしたときには、一たん請負ふた苦力頭なぞが、仕事をなげ出して逃げる場合もある。草取りはゴム林にとって一番大切な仕事である。僕は一度雑草の中でも、最も獰猛なララン（茅）群の強襲に向はれて、酷い目に逢ったこともあった。

低地では排水の注意が最も必要で、畑の中には本溝と連絡して縦横に溝が堀られて行く。土木工事に熟練したジャワ苦力の群は、大低これ等の作業に従事する。若い日本の監督者はトランシットを携へて、よくそ

れぞれの予定線を測量しては、標色の棒を立てて歩いた。

（中　略）

河岸から一直線に、馬来人の小さな村を貫いて、開墾地の入口にとどく大道路の終点から、左右に道が筋かいに分れ、左には馬来人の苦力小屋が、アタップ葺（ニッパと稱する木の葉にて葺けるもの）の屋根を並べ、右の角には一軒の支那店が、食料品などをひさいで居った。

大道路の突き当りには、仮事務所の建物が、神社のような恰好をして、高い階段の上から往来を見下ろし、それに接し、大溝一つを隔て、道側に共同社宅のN寮が、開墾地の一部を占領して居る。僕の社宅は、丁度事務所の後方につづく小路に沿ふて建てられてあった。

家をとりかこんだ周囲の開墾地には、ゴム樹が整然と列を正し、見渡すかぎり若葉が風にそよいで居る。

夜闌にはよく虎の声を聞いた。シーンと沈まりかへった真夜中の寂寥を劈いて、深い暗の底から、アウーンと一声底力のある咆哮が轟きわたるときは、唸りの音波が、四辺に反響して、実に物凄い感じがする。開墾地内の道の上にも、折々虎の大きな足痕が、牡丹のような形を地上に印して、恐ろしい猛獣の徘徊したあとを示して居った。（略）

とある。

こうして三年の月日も流れ、植林地も漸く軌道に乗りかけた時、事務所長の稲垣圭三郎がチブスにかかって急死した。

「生命の廃墟」（一一二頁―）

法学士Iが病にかかって、シンガポールに治療に赴いた。やがて病勢が昂進し、事務所の一室で、激しい苦悩のあと、彼はチブスのために、前途有望の身を死の床に横たへた。其訃音が到着したとき、僕たちはどんなにか驚いたろう。あの強健で、しかも業務のためには、如何なる苦しい努力も厭わなかった、植林地の大功労者たるIが、そう一朝に他界の人となろうとは、まるで夢のようだ。僕はつくづく人生無常の感にうたれた。

シンガポールで盛大な葬儀が営まれた後、分骨が植林地に護送されたので、其晩一同はN寮に集まり、森厳なる通夜に連って、その想出深き位牌の前で、無量の感に満みちた一夜を明かした。

眼の前にはIの四角張った肩を聳かし、背の高い眼光の優さしい丸顔の、いつも革のゲートルにカーキー服の軽装で、タオルを首に巻き、急ぎ足で現場を検分して歩くく姿が、其時までちらついて居った。

彼は肥前平戸の生れで、東大政治科出身である。其養父は既に物故して居った有名な外交官で、其博大なりし植民政策の造詣ある著述は、あらゆる人の口に噌炙され、なを、昔、其任地の逕路には、南洋と縁近き印象が残って居った。Iの生活の主なる部分が、其父の理想に関係ある海外の活動に占められて居ったと言うことは、一層僕たちの感慨を深くしたのである。

一夜の哀悼が済んで、翌日、故人の墳墓は椰子林の出端れなるゴムに取り囲まれた丘の上に、其紀念多き姿をとどめた。

荘重なる告別式が行はれ、深い哀愁の空気の中から、参列した人々の胸の奥に忘れがたき印象を刻んだ。

今でも其寂しい墳墓は、周囲に熱帯の草乱れ、折々ゴムの梢で小鳥の囀づる声が輓歌を奏して居る。幾年月が流れても、この植林地のつづく限り、Iの心霊の声は、いつまでも、此事業地の意味深き歴史を物語って居るであろう。

とある。

圭三郎の養父稲垣満次郎は、文久元年平戸で生まれた。英国のケンブリッヂ大学卒業。『東方策』などの外交政策をかいた有名な学者であった。明治三〇年、初代のシャム国公使となって南方外交につとめたが、四一年四七才で病没した。圭三郎は、この父の理想をついで、今骨を南洋に埋めたのである。

○ 虚　無

稲垣の死につづいて、「生命の廃墟」（一一四頁―）には

月は代り、歳は移って、植林地の面影は眼ざましき進展のあとを示す。幾多の社宅や苦力小屋は増築され、道路は完成し、縦横に輕便軌道線は走り、多くの従業員、沢山の苦力は蝟集して、次第々々に賑かな村落にも均しき光景が展開されて来た。

鬱葱たるゴム林や亭々たる椰子林は、赤道直下の日光に輝されて、其壮麗なる青葉の光を漲す。僕は更に新築されたN寮の傍なる第二の社宅に引移った。千坪以上の敷地の周囲には、種々なる熱帯の花卉や、果物を植へ、家の軒近く壘々とした芭蕉の実が、その豊かな房を垂して居る。日中の労れから夕暮の沐浴に蘇へった身体をヴェランダのフローの上に横たへ、軟風に吹かれながら、静かなる四辺の虫の音に耳をすませた当時の幽寂なる気分を僕は今でも想ひ出す。

しかし、其頃、僕の心の内奥には、さまざまなる精神上の問題や人生の感想が、滾々と渦を巻いて、深く深く内省の波をあげて居った。其ヴェランダの瞑想。如何にして生きるかと言う痛切なる心の問題、死の感想、現在の生活に対する疑問、理想と現実との葛藤、霊肉の不調和、思想の憧憬と官能の欲求との矛盾、家庭の些事、日常遭遇する事件、さまざまの解決が日毎に迫って来た。心は動揺する。神経は奇々する。居ても立っても寂っとして居られないような気分の幾ケ月が続く。それでも昼間は業務に追はれて居るが、夜が近づいて四辺が静まりかへると、僕は無言の中に想ひ悩んで居った。

時にはウィスキーを痛飲して、其心持ちをまぎらしたり、衆と共に放歌高吟して、愉快らしく哄笑したりした。そうしたあともまた黙臥して内省の虜となって居った。

中にも十数年来に亙る根本問題がどうしてそう容易に解決が出来よう。

とある。

これは稲垣圭三郎の急死の頃からしばらくつづいた心の彷徨であった。その頃のものかと思われる雑記録中の断片がある。

行　雲

大正三年五月九日一切を否定す。

生も然り、死も然り、一切の人類を否定す。あるが侭にあれ。理想もなし、希望もなし。どうでもよし。

白眼高踏只談ぜんのみ、吟ぜんのみ。

ショペンハウエル。荘子。深草の元政。

行く雲や昨日は東今日は西

何も欲せず、法界無辺。飲みたければ飲み、喰ひたければ喰ひ、寝たければ寝る。

その外に何かあらんや。

努力の要もなし。

外見、外聞、畢竟何ぞや。

色即是空　空即是色

行くところなく往するところなし。

南　無　阿　弥　陀　佛

とある。時に文八数えの三五才であった。

○　K先生の出現

Kとは、ゴム会社の総支配人木村大介である。木村は広島県三原の人。台湾総督府の役人（勅任官）をしたこともあり、人世経験も豊かで、年令も五〇に達していた。

「生命の廃墟」（一一七頁―）

要するに僕は霊界の乞食に過ぎなかった。所詮求むるものは内にある。あらゆる外界との交渉を絶して、端的に、直下に、真我と当面するまでは、きれぎれにもひとしき心の襤褸を引きづりながら、いつまでも流転の旅を続けて行くより仕方がなかった。僕の半生に拂った心の代償は、まだ足りなかったのであろう。

こう言う状態に在ったとき、シンガポールよりK先生が転任して来られた。僕はあえてK先生と呼ぶ。先生は会社の総支配人で既に知命の域に達して居った。業務上のもとより先輩でもあるが、それにもまして彼は心の指導者であった。南洋における事業開発の重鎮で、聡明なる人格者である。

若き頃より生死の関門をくぐって、真剣なる心の戰いをつづけて来た此巨人は、徹底したる其見地より、僕たちの迷盲をしばしば片言隻句に喝破して教えられた。

堂々たる風姿、悠揚迫らざる態度、如何にも引レ満ヲ不レ発セと言う趣で、惇々として語る座談の中にも、ほとばしるかと想はれるばかりの意義ある暗示が閃いて居った。殊に禪と陽明学とにより鍛えられたかと推せられる思想と体験とが、日常にほの見えて、言動の表現は、遺憾なくそれを発揮し餘蘊なかった。

むしろ藩山・素行と言うような、実学派の思想家に憧憬する師は、ひたすら空理空論を避けて、現実に躍動する生命の謳歌者であった。

此実行的哲人は、それにも拘らず、ヘッケルや、イブセンや、ジェームスや、ベルグソンや、タゴールにまで、世界の近代思潮に触れて、其卓抜なる批判は、世間評論家の見解なぞの、到底及ぶところではない。そのタゴールよりひいて、ウパニシャードに対する感想は、津々として尽きざる興味を、今なを僕の耳朶にとどめて居る。荘子は殊によく、師の推賞するところであった。「ああ言うものを通俗物語にでも書きなを

したら、定めし面白からう」。そうした言葉が話に洩れたりした。

虚偽を蛇蝎の如くに嫌ふ師は、いつも、「人は己れを欺いてはいけない」。と言うことを、口癖のやうに言ふ。人が本然の性に帰って、天真の流露するほど尊いことはない、と言う例証を、馬来山奥の土民生活などから引照して、話されたこともあった。

要するに師の哲学は、難しく言うに及ばない。真実と、單純と、自然と、ただそれだけである。さらに基調とするところは、生命は力であり、愛は極致である、と言うことにある。それは生命派の哲人の言詮に、余程よく共鳴して居る。故に教育に関しても、ルーソーの『エミール』に近い自由主義を把持して、より多く力を加味して居る風に受取られた。

死に対しての話に、人が死ぬ前に辞世などを残すのは、一種の愚痴に過ぎない。真に徹すれば、死ぬのも飯を喰ふのも撰ぶところはないと。また霊と肉とを離して考えるのはまちがって居る、それは一でなければならないと。（略）

とある。

この木村大介が来たのは大正四年頃かと推定されるが、この知行合一の大先輩によって、文八は、虚無的空想から脱出できたのである。彼は元気を出して、また、スピノザや、ドストイウスキーや、マックススチールナーや、ニーチェや、オイケンや、ベルグリンや、タゴールや、ロマンローランなど、そして日本人では、漱石や芦花の作品をむさぼるように読みつづけたのである。しかし、

「生命の廃墟」（一二七頁）

これ等多くの哲人高士が精進解脱の途上にとどめたる足跡を追従して、この心霊的巡禮者は、南方のゴム林の中で、心の漂泊を続けて居った。しかし、それらのいづれを通じても、僕が根本的信條たる絶対他力の信仰、親鸞上人や清沢先生に対する唯一尊崇の念は、事に触るれば触れるほど、想ひに乱るれば乱れるほど、依然として僕の亡びんとする心情の糸をつなぎとめて、絶へず、此漂泊者の導きとなって居ったのである。

かかる際にも、強きK先生の自力の大見地は、弱き僕の他力の心證に、より多くの光と、より多くの力とを寄与せられた。

とある。

この頃書いたと思われる雑記中のメモ。

南無阿弥陀佛

大正五年五月一日

復活。　霊の誕生。

如来を信ずること。平常心是道。

清澤先生　　ソクラテス

南州翁　　王陽明

エピクテタス　　エマーソン

絶対他力の信念

精神主義　簡易生活　自足自充の天地

日々是佛行

道を患へて衣食を患へず

道心の打出　不折出を検せよ

佛心に任せよ
人を対手にせず　天を対手にせよ
そして己れの誠の足らざるを咎めよ
信仰の生涯
霊的境涯の消息
心のまま

とある。

この頃彼は数名の友人と「談笑会」と言う会を開くようになった。自由に人生論や宗教論を語り酒を飲んだりもしたようである。パンフレット風の同人誌『南光』をも出している。

○母の死

「生命の廃墟」（一五五頁―）

大正五年の冬、最愛なる母は、かりそめの病がもとになって、急に帰らぬ浄土への旅路に赴いた。その訃音が、当時馬来半島に在住して居った僕の手許に届いたとき、僕は茫然夢のような気持で、赤い海外電報の紙を握ったまま、そのときはかえって涙さへ出ないような始末であった。それは余りに思いがけない通報である。とかく病がちの父を心配して、折々の消息には、きっと其容体を案じた気持を、いつものがしたことのない母が、其病める父よりも先に、亡き数に入ろうなどとはどうして想はれよう。僕は何かこれは電文の誤りではなかろうかとさへ、一時思いまどった位である。

しかし、どうしても疑ふことの出来ないその訃音は、深い悲しみのどん底に、僕をつきおとした。

両親にとって、ただ独りの子である僕は、どんなことをしても帰朝せずには居られなかったので、早速K先生に許しを受け、妻を一人残して、無限の悲嘆を懐きながら、シンガポールを出発したのである。

長い航海中、僕の胸の中に、母は常に生きて居った。帰朝してから、故郷の門に佇立んだとき、僕の寂しい感慨は、とうてい筆に書き現わせない。いつも玄関に、いそいそと出迎へてくれるあの母は居ない。大正三年僕と妻との帰南を、或日の夕暮、其家の門に、寂びしく見送りながら後の見えなくなるまで、そこに立ってをられた母の老いた姿は、今尚はっきり胸の中に印象されて居る。（つづく）

とあるが、文八夫婦には子供がなかったので、大正三年、故藤堂紫朗の三男良男を養子に入れて、老父母が、孫として養育することになったのである。その時藤枝で文八を送りだした母の姿を思い出しているのである。

（つづき）それから茶の間の長火鉢に坐って居る父の前に出たときは、涙にばかりくれて、一言も口をきくことができなかった。病める父は、一時に年を重ねたかと想はるるばかり、悲嘆と気落ちとに滅入って、僕はそのとき、それを正視するにしのびなかった。殊にその懐しき佛間に入ったとき、先年母が、其部屋で、僕の身を案じ、寒さに風ひかぬよう、父の下衣を重ねて着せて賜わりし、当時の温き愛情を想い起して、熱涙にむせんだ。

そのときは故郷のR寺で仮葬がすんで居ったので、そこに安置して在った母の遺骨を抱き、僕は義子のYを連れ、父を残して上京してから、旧幕以来の先祖代々の菩提寺なる本所のG寺に於て本葬を営んだ。

さらに帰南の途次、其分骨を奉じて京都に立ち寄り、大谷本廟の松風静かなる宗祖の墓畔にそれを納めた。

母の一生は、実に忍従と愛苦との尊とき生涯であった。当時の追憶は縷々(るる)として尽きない。

とある。

菩提寺源光寺は本所区（現墨田区）荒井町五七番地にあった。ここは杉浦家代々の墓地であった。

八　スマトラのゴム園・父の死

○ 南洋ゴム

南洋ゴム会社が、蘭領スマトラに新しいゴム園を設立することになり、その重任にたえる人物を探していて、その相談が、三五公司の総支配人木村大介に持込まれた。大介は文八を推薦した。大正六年一二月であった。

「生命の廃墟」（一三〇頁―）

昔虎や山豚の横行して居った原始的処女林のあとは、今、当時を夢の如く偲ばせるような、秩序整然たるゴム園に化して居る。

僕は数年間に亘った努力のあとが、茲に空しからずして顕現したのを紀念とし、やがて他の会社の新事業経営を引き受け、蘭領スマトラに向ひ、住み慣れた馬来半島を後にしたのである。

蘭領スマトラにおける土地撰定の数ケ月間、此習慣と制度とを異にした異境の踏査は、僕をして蘭人の生活や、土民の風習や、それにもまして、事業関係の複雑なる幾多の試練や、新しき経験やの、かずかずを味はしめた。

出発の最初、僕たちはシンガポールの和蘭(オランダ)領事館で旅券の証明をとり、タンジョンパカーに繋がれた蘭船「ランピュース」号に身を投じた。同船には、視察に赴く前会社の恩人K先生と其秘書H、当時日本から臨時出張して来た僕の会社の常務Y、将来作業主任として僕を補佐する予

定のT、それから僕との五人が、此始めての旅に向った。

マラッカ海峡の浪をけって一昼夜の後、一行はブラワン港に上陸し、メダン市から出迎へのIに伴はれ自動車で東海岸州の首都に走った。其三十分間の沿道の光景、それは馬来半島と感じを異にした熱帯の風致、欝蒼たる樹木に取り囲まれたどの村落も、まるで温室の中でも通るような清新の気に満ちて居る。僕たちはメダンに到着して、蘭人経営のホテルメダンに投宿した。

（中　略）

一夜をホテルに明かして、翌朝から一週間、毎日一行は自動車を駆って、東岸州の各地を縦横に視察した。其中でも或英国人のゴム園の眼醒めるばかり整然とした施設、そのゴム林の道路の畔に植えられた草花の色や、若きゴム樹の根元を間隔毎に縁取った毛氈のような青草の葉や、その園の宏壮なる風致に富んだ社宅や、とうてい半島では観ることの出来ないものであった。

殊に驚いたのは、蘭米合同の大会社が、東岸州の鉄道沿線に四万エーカの採収林と六万エーカの未墾地とを扼して、縦横に通じたる軌道や、市のそれをも凌駕する大規模の病院を設け、其植林地の一角に小市街をさへ展げた雄大な設営の、異彩ある一大光景であった。汽車は一時間も縦に其園の中を走るほどの廣さで、所々にはゴム園専属にもひとしき停車場が設けられてある。

とある。

文八らが自慢にしていた三五公司の新植林園も、その近代化において、雄大さにおいて、経営の合理化において、遠く及ばないものを見たのである。

文八が赴任した大正元（一九一二）年頃は、マレー半島が世界最大のゴム産地であったが、大正七（一九一八）年頃には、スマトラがそれにまさる最大のゴム産地となりつつあったのである。そして世界的ゴム増産となり、読売新聞（大七・六・一）によれば、それがゴム相場下落につながり、当時は一ピコリ九五円から一〇五円の間を上下していたと言う。またスマトラの合理化された新施設の一ポンドの生産費は一九銭、マレーの日本人経営の生産費は四、五〇銭だったとも言っている。

文八らは、その後数ケ月にわたって、調査や交渉を続けていたが、半年の後商談は成立した。

「生命の廃墟」（一四三頁）

やがてYは後事を僕たちに托して、Tを伴ひ再びシンガポールに引き上げた。僕はNと共にTゴム園の買収策に着手して、其紹介者たる蘭人Cとの會見を重ねたのである。しかしCとの商談は、不得要領に移り、僕はシンガポールに無駄足さへ運んだ。

ところへ都合よくメダン在住の日本貿易商Sの関係で、同一の話が、同市の支那富豪Tの顧問たる蘭人Oとの間に復活し、更に綿密なる検分の後、幾多の商談が、屢々内地との電報と相俟ってから、漸くTゴム園の所有主たる和蘭株式会社の株主間に、僕たちが買収に対する価格の議がまとまり、Oを通じて商談が成立し、相互の受渡がすんで、スマトラ渡

航後半歳、始めて新事業地の基礎が確立した。そこでTゴム園は、日本株式會社の名義に登記をすました。

商談進行中、或要件を帯び、僕はシンガポールに渡航したので、そのついでに一家を引きまとめ、妻も共にダナンに来たので、しばらくYホテルに滞在し、やがて市の一角に在る和蘭式の貸家に引移って、Tゴム園に入園するまで、当分そこに暮した。

其内いよいよ僕たちは、買収した其園に引越すこととなって、メダンを引き挙げた。市から鉄道で三時間、T停車場に下車し、その駅からさらに自動車で約二時間ほど国道を走って目的地に達するのである。蜒々たるゴム林の梢は、其入口から一哩ほど手前になると、もう道に沿ふてかすかに、境界線のあなたに、車上から望見することが出来る。（中略）とある。これはかなり広大な、近代的ゴム園であった。

採取林のゴム樹は見事に発育して、欝々と枝をまじへ、日毎に澤山の苦力たちが、ゴムの液を集めて居る。若き植付林の手入れ、苗床の準備、溝の浚渫や、道路の修繕、工場の整理、其他様々な雑事が、次第々々に順序よく片付けられ、作業は月々に進展して、園の秩序を整頓して行った。

政庁との交渉やら、契約移民の取扱やら、販売の連絡やら、開墾の豫定準備やら、一同の人たちはよく熱心に働いた。中でもNの誠意ある補佐と、従業員Oの摯実なる努力は、とりわけ深く印象される。僕は踏査、買収以来引続き其他のことで、長く苦楽を共にしたNに対しては、特に感謝の念に堪へない。

とある。

文八はかくて経営の基礎をきずいて、大正七年の暮、久しぶりに、日本に帰ってきた。そして八年正月には、大分に社長を訪ね、事業報告をすませた後、父の健康も案じられたので、しばらく東京本社勤務をすることになった。本郷吉祥寺境内に仮寓を定めた。

八年四月社長死亡を機にして、南洋ゴム会社を退職した。

○父の死

「生命の廃墟」（一六二頁―）

四月になって或事情のもとに、南方の事業関係を辞した時分のことであるが、当時三浦半島の一角に病を養って居った父は、急に病勢が昂進し、五月に入って遂に亡き母の後を追ふた。

歸朝して折よく父の病床を守ることのできた僕は、あの寂びしき臨終の枕辺に侍して、剛健なる生涯の、はかなくも暁の風に消え行くのを見守り、深く深く胸うたれた。

父は、明治初年の陸軍出身で、西南・日清・日露の三大戦に参加したことのある老軍人である。若き頃欧州に留学し、新鋭の造詣をもたらして帰朝せる後、三十有餘年を軍務に献げ、晩年は満州の或特種な任務の要路に立って活動して居った。その頃の重要な議に際しては、袁世凱や除世昌なぞともしばしば会見したこともある。

そうした経歴の末、職を辞し、駿河の片辺に引退して、母と共に静かに暮して居たが、やがて母が永眠して後、不自由なる病の介抱者たるべ

く、第二の老妻を迎へ、僕がスマトラ在住中に三浦半島に移転し、其地の私立病院長なるY、その人とは昔から特に意気相投ぜる間柄で、殊更、その医術的手腕に傾倒して居ったところから、その好める治療を永く受けるために、そこへ隠宅を構へたのである。

斗酒なお辞せず、いくら飲んでも、決して崩れざる、生来酒豪の父は、臨終の前日まで盃に親しんだ。たまには僕もその枕元に坐して、一酌するのを、心持よげに眺めて、大病人に似合はぬ戯言を言ふこともあった。

死に瀕する二三日前の夕方、看病がてらに、僕が病床の前の床柱に倚りかかり、膝の傍に盃を置いて独酌しつつ黙して居ると、ふと僕の方を向いた父は、にっこと微笑みながら、「後方に柱、前に酒、左右に女、懐に金か」と、苦痛の中から、よく落語家のやる諧謔を弄した。そのとき僕の左には妻、右には看護婦のTが居たのである。死を一夜の睡ぐらいにしか重く見ない父は、かかる断末魔に近づいた日ですら、綽々と心の餘裕を持って居たので、僕は目前に控えた生死の大問題に対しても、なんとなく軽い気分をさへ覚えた。

平素生死を昼夜のように、淡白と考へて、死ぬのはいい心持に眠むるようなものだなどど、口癖にして居ったが、父の死に対する覚悟は、既に三年以前から棺桶をすら用意して、それをY病院に預けてあるのでも知れた。

しかし昏睡状態に陥いる其前日には、床の上で僕の膝にもたれて、頭を撫でられて居るのを大へん心持よげにして、肉体に苦しみながらも、いろいろと僕の精神的物語などに耳を傾けた。その刹那に僕はなんだか、年老いたる赤児を抱く親のような心持に浸って、しみじみ他力と言う感じを胸に懐いた。

一夜の人事不省からつづき、暁頃に静かに息を引きとった。父の亡き顔には、どことなく平和の面影が浮んで、病んで生ける日のときよりも、かえってにこやかであった。

（中略）

父の遺骸の枕元に護られている、阿弥陀如来絵姿の御尊像から、御慈悲の光が、ひしひしと身に触れてくる。宗祖の御実感が、今更のように胸に響いて、僕はただただ有難さに、如来と父の霊を拝んだ。今や父は、この虚假不実なる人の世を去って、限りなき壽命、限りなき光の国へ旅だたれ、亡き祖父母や母と共に、浄土に生まれ、如来攝取の光明に輝らされて居給ふことを想へば、僕は悲嘆の中からも、感謝の念佛を誦せずには居られなかった。

（下略）

とある。

父の死は五月一五日であった。私葬は現地横須賀で行われたが、本葬は、後東京の青山で行われた。

「生命の廃墟」（一七一頁）

忝くも県知事が勅使として下向され、白絹二匹を下賜されて、僕は光栄身に余る想ひをした。

それから東京の青山祭場で鄭重に葬儀が営まれ、儀仗兵の哀しき吹奏に続いて、式が森厳に行はれたのである。当時A大將の慈愛に充ちた御

世話や、Y中將N中將の懇切なる父に対する友誼、それからB少佐A中佐U少佐たちや、その下僚の手厚い御骨折を、深く深く感謝して忘るることが出来ない。

とある。

浅田信興大将が葬儀委員長となり、山根武亮中将、中村愛三中将の世話で、葬儀は盛大に行われた。好問六三才、文八四一才だった。

九「生命の廃墟」をめぐって

○シンガポールゴム会社

大正八年五月、文八は父の残したかなりの遺産と、彼自身が二つの会社からもらったかなりの退職金をもっていた。

「生命の廃墟」（一七一頁）

僕は南洋出発以来、いろいろな人生の問題に逢直して居ったに拘わらず、月日のたつに従って、だんだん世間的欲望に心を惹かれ、殊に戦後経済界の調子づいたる好景氣は、じっとして居るに忍びざらしめた。

幾多の時間と費用と労力とを費やして努力して見た計画のどれもが、今一歩と言う土俵際までは進んで行ったが、何れもいろいろな事情や関係から、結果を見るに到らなかった。

そのうち財界の不況時代が到来したのと其後の問題が行き悩んだ御蔭で、幸に此一文を草することが出来たのである。すべては心霊の巡礼者にとって良い試練であった。

とある。

文八は、この事件については、これ以上何も語っていない。

かね未亡人の話によれば、南方に残した旧部下たちにすすめられて、シンガポールにゴム会社を設立したようである。文八は東京にいたが、旧部下がシンガポールで働いたのであろう。

従来ゴムの値段は、一ポンドが二ドル五〇セント位であったが、小島が出動した時は一ドル一〇セントであったと言う。当時は一円が八五セントの時代であった。

前章でも書いたように、大正七年に彼が南洋ゴム園を設立した時、すでに、ゴム増産体制のために、ゴムの値段は下落気味だったのである。

しかし大正八年の後半は、続落の物価が、反騰に転じた時期であった。ちなみに、六月一五日の読売には、「凡てを蔽ふ騰貴の字」とかかげて、物価の昂騰を心配している。また七月二七日の東京朝日には「物価こんなに高い、最近四箇月に三割以上」と題して、物価の上昇にもかかわらず賃金がひき上げられないので、労働者の生活が逼迫したと書いている。

文八が人々にすすめられて、ゴム会社設立にふみきったのは、こんな時節であった。しかし翌大正九年は、「株価、商品相場暴落」の年であり、「世界的戦後恐慌」の年であり、国内的にも「銀行取付騒ぎ」の年になってしまったのである。

そしてゴムの暴落は果てしなく続き、文八が会社を解散した時には二十五セントになっていたと言う。彼はすべての責任を一人で背負って、家屋敷を売り払って二五〇万円を投入したと言う。

「幸に此一文を草することが出来たのである。すべては心霊の巡礼者にとって良い試練であった」と、結んでいる。一文とは、この「生命の廃墟」である。

○「濱辺に来て」

「生命の廃墟」（一三頁）

十一月六日午後七時に霊岸島を出帆した房州通ひの天城丸の甲板上には、たった三人の乗客しかいなかった。中年を越した婦人と、頑丈な若者、それから僕とである。

（中　略）

から始まっている。

甲板の莚に坐って、文八が二人の身の上話を聞くのである。青年はカムチャッカの鱈漁の出稼から帰ってくる素朴な男。婦人は夫と二人の愛児を同じ年に失って、苦痛に堪えて生きてきた女であった。

彼女は絶望にかられて西国巡礼に出た。しかしその時、ふとした縁で、一燈園の西田天香を尋ねるようになり、その教にふれて無所有の信仰に生きるようになった行商の女であった。

文八は、この女の姿に深く感動しながら、船形観音近くの宿所に着く。それはかね子夫人の甥の別荘だったとか。文八はそこで黙想の生活を続けた。或日の夕方、赤陽に照らされながら平和に働いている漁師夫婦の姿に見入る。

（つづき　一九頁から）ああ大自然の中に生きる民衆の美しき画幅よと、僕は叫んで、忍苦と生命と愛との交響楽に、そぞろあの懐しいミレーを想った。

神秘で、無作法で、赤裸々の自然。そしてすべてが真実に、苦惨なる戦ひの中にも大きな愛が潜んでいる。一切はそのまま、このまま、でよいのだ。

と結んでいる。

この「濱辺に来て」は、一種の短編小説であった。この中では、主人公の僕は、何故、なんのためにここに来たのかを語っていない。

○「生命の廃墟」の発想

「濱辺に来て」を短編小説風に書き終えた時、文八は、ふと自分の事を書いて見たいと思うようになった。それが「南洋から」の章である。

「生命の廃墟」（二〇頁）

船形の濱辺に来て、眼の前の海洋を見ながら、僕は過ぎし南洋の生涯を想ひ起した。

さきに紀念多かりし蘭領スマトラ島東海岸州に、或会社の事業基礎を創設し、其ゴム園をあとにして、一昨年の十一月帰朝の途に就いたその当時から遡って、ありし日の面影を偲んでみよう。（略）

から始まって、シンガポールまで帰ってきた時、親友奥村壽の臨終に出会った。

この奥村の死を起点として想出は七年の昔に遡る。それが本研究の七章「マレーのゴム園」、八章「スマトラのゴム園」へとつながってゆくのである。そしてこの「南洋から」の末尾は、八章の「父の死」、九章の「シンガポールゴム会社」の失敗で終っている。

ここまで書いてきた時、彼は「生命の廃墟」冒頭の㈠「一念帰命」とはしがき」を書いて見ようと思ったらしい。

○「一念帰命」と「はしがき」

「一念帰命」（「生命の廃墟」一頁）

或時は心奢り、或時は心沈み、常に内心の動揺にひきづられて、醜き生の姿を曝らしつつある僕が、あせりにあせって、自力の荒海に漕ぎ出だし、心霊の暴風駛雨に襲はれ、闇黒の障壁に突き当り、一進も三進もとれず、生か死かの二途に昏惑するとき、忽ちにして、絶対他力の光明は、微かながらも彼岸の燈明台と現はれ、窮厄疲弊せる心の船子に、また一道の輝きを示して、煩悩そのままに、浄邦楽土の行手を与へ給ふのである。（略）

から始まり、心霊の道師清澤滿之の霊感録中の教を語り、さらに、

十二月十四日は、僕が此世にはじめて光りを見た誕生日なので、此日を紀念として、新しき生活改善を試みようと豫期して居た。なんと云ふ自力根性だろふ。絶対他力の信仰に没入するものになんの改善があろふ、一切が大悲の顕現である以上、すべてはあるがままであるべきではないか。刻々の生、刻々の死。刻々の死、刻々の生を、味ひつつあるものに、どうして明日があろふ。念々臨終の一生には刹那がこれからである。果して此誕生日は改善どころか、最も甚しい無明長夜の踊を見せつけられた一日であった。　（中略）

「生命の廃墟」（一二頁）

下根の凡夫たる僕は、ねがはくば、運命を愛し、痛苦を讃美し、流転輪廻の浅ましき自己を絶対他力に乗托して煩悩具足のまま、罪悪生死のまま、途上の巡礼をつづけて行きたいと想ふ

今僕は人生の一角に立って、生命の廃墟を眺めて居る。

と結んでいる。

これは十二月二十日前後にまとめたものであろう。そして次に「はしがき」が書かれる。

「はしがき」

今日は大正九年十二月三十一日の大晦日である。なんとなく静かな朝だ。明け方から雪はシトシトと降り出して、見るまに、庭の樹木や四辺の屋根を真白に粧ふてしまった。過去一年間の塵埃が、この天の白布によって覆はれ、慌ただしい人々の心もシンミリと浄化されることであらう。

僕は過ぎゆく此年の間に手痛く試練をうけた。霊の破壊、物質の損傷、生活の動揺、心の暗闘、さまざまのことを想ふて感慨無量に堪へない。年々味ふ歳末の感と雖も、今年のように深刻な印象を刻んだことがない。

（中　略）

僕はこれまで、くだらぬことを書いて居ると想ひつつも、此生の廃墟に立ちて、過ぐる幾歳の流転を追ふて来た。なを更に前半生の想い出にまでも、うつろうと考へたが、先内部に波瀾多かりし此歳の終りを紀念として、茲に擱筆することとした。

（中　略）

どうか、みどり子のように無心を、僕はただそれだけを念ずる。しかしそれは妄心のままの無心、執我のままの無我。どこまでも本然の生へ、自然へ、あるべき姿で進んで行きたいものである。

今や此一篇を紀念として、生の廃墟に永遠の法燈をかかげ、一切萬霊と、刻々に抛げすてる自分の屍との供養に、そなへようと思ふ。

大正九年十二月

著　者

とある。

大正九年十二月三十一日、「生命の廃墟」の前篇が書きあげられた。大正元年から九年に及ぶ追憶であった。

○　後篇の成立

大正十年になって、㈣長江の畔、㈤赤道を越へて、㈥鍬を持つ男、㈦絶海の離れ島、㈧日露の頃と書きついだようである。

この「生命の廃墟」が、日露の頃で終ったのは、明治三十七年松山時代に、清澤滿之の他力の教に覚醒されて以来の十八年に及ぶ、長い心の旅路をさかのぼって、書き綴るためだった。

後篇の終りには

「生命の廃墟」（四〇〇頁）

此稿の最後が日露の頃に終ったため、その以前にさかのぼって、当年愚鈍僕の如きを導いてくれた先輩独歩や、畏友臨川、また蘋陽たち故人の上を偲ぶまでに及ばなかったことを遺憾とする。僕が境遇の変転は、これら故人との交情を疎遠にして、遂にその生前再び相会して、久闊を叙する機なからしめた。

今僕は此稿をとづるに際し、謹んで彼等の霊に謝す。

とある。

大正十年、文八がこの「生命の廃墟」を書き終えた時、最初に見せたかったのは、独歩であり、臨川であり藝陽だったのだろう。ちなみに、若き日の文学の友、中澤臨川は、大正九年八月一〇日に他界、その遺著「嵐の前」は、一〇年一月一五日に出版された。

○ 終りに

文八はこの後も、他力本願の行者にふさわしい道を求めながら、昭和一二年九月二三日秋分の日、ホイットマンの詩をかすかに唱しながら、大往生したと言う。数えの五九才であった。

高松短期大学研究紀要

第　9　号

昭和54年3月1日印刷
昭和54年3月10日発行

編集発行　高松短期大学
〒761－01　高松市春日町 960

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町 2158